
秋山佐藤のデイバイデイ

秋山陽太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋山佐藤のデイバイデイ

【Nコード】

N9421N

【作者名】

秋山陽太郎

【あらすじ】

秋山右京がある日ふとしたことから小説を書いた。それが佐藤陽太郎の手に渡りそこで陽太郎はさらに小説を書いた。交互に小説を書きながら二人の日常を描く学園モノ。

兄が大好きな妹に加えガンオタの先生。右京の家に住み着く神様や超金持ちの隣人など様々なキャラクターが織り成すドタバタコメディ。

(前書き)

この作品は秋山佐藤のデイバイデイというシリーズ作品のまとめのようなものです。ですのでキャラクターが突然出てきてはあまり活躍せずに消滅するという意味不明な展開があります。それを許せる方のみどうぞ。

つまらないといわれても言い訳するつもりはありませんのでどんな批評もどうぞ。

1日目 月曜日。

俺の名前は秋山右京。妹の名前は秋山落葉。友人の名前は佐藤洋太郎。ふと、そんな言葉が浮かんだ。意味はない。俺の名前と妹の名前と友人の名前を並べただけだ。

「行ってくるわ、お母さん」

「行つてらっしゃい」

玄関で妹の落葉と俺の母親が挨拶を交わす。

まあ、見た目だけで判断しなければ俺は高校一年だ。しかも今日がその入学式。そして落葉も今日から高校生。通うのは最悪なことに同じ学校だ。

落葉の身長は170センチメートルくらい。服装は桜色の着物。

振袖。着物と言う服装で外見からだとは分かりにくいかも知れないが、この妹は結構グラマーなボディの持ち主である。胸がでかいしウエストは細い。足も長い。黒く、きりつとした瞳に腰まで届くロングヘア。それなのに目を閉じれば呪いをかけられて眠りにつき王子様のキスを待つお姫様のような顔立ちになる。はっきり言って、美人、可愛い。ただ……性格がなあ。

俺は落葉の挨拶に続いて言う。

「それじゃあ行ってくるよ、母さん」

「右京も、行つてらっしゃい」

俺と落葉は玄関扉を開けて外に出る。俺が住んでいるのはマンションだ。だから扉を開けるとまず共同廊下が目に入る。そして俺が住んでいるのは505号室。端っこだ。右に壁があり左に通路が続いている。

したがって俺と落葉は左に向かって進んだ。でもって、ある人物と出会う。

「おはよう妹さん。それから右京」

佐藤だ。先ほど紹介した友人の佐藤だ。佐藤は中学時代の制服に身を包み自宅のドアに寄りかかっていた。妹さんとは落葉のことだ。佐藤は落葉のことを妹さんと呼ぶ。そして俺のことは呼び捨てで右京。まあ、俺も佐藤のことは佐藤と呼び捨てだから平等だ。

佐藤はぱつぱりと切った飾りつけのない髪に俺と同じくらいの身長、170センチメートル。そしてやけに大人びた物腰に落ち着いた表情。中学時代の服に身を包んでいなければ大人と間違えてしまうだろう。

まあ、それも出会ってから3日間くらいで佐藤の本性を見ればせっかく持った素晴らしい第一印象も崩れ落ちる砂の楼閣のごとく。「この服装かい？ いや、実は入学式という場に出席するに相応しい服装がこれぐらいしかなくてね。まあ、それはお前も同じか。右京よ」

佐藤の言うとおり、俺の服装も中学時代の制服だった。しかし理由は他に無かったからではない。それを説明する俺。それを軽く聞き流す佐藤。

俺と落葉と佐藤は幼稚園児時代からの付き合いで、いわゆる幼馴染ってやつだ。ちなみに、この物語の主人公は俺であるが、佐藤はもう一人の主人公と言う位置づけだ。基本、家にいるとき意外俺は佐藤と一緒に行動する。だから佐藤をもう一人の主人公と呼んでも過言ではない。ただし主人公と呼ぶと過言なので位置づけが非常に難しい（単純に主人公の座を独り占めにしたいという本音は決して言わない）。

俺と佐藤と落葉は高校までの道のりを歩き始めた。俺たちが今日から通う玉川高校は非常に近い。家を出て二十分で到着する距離だ。多くの学園ストーリーで言うところの登校という時間こそが筆者に与えられた主人公の性格表現や主人公の通う学校の説明時間である。しかし俺の顔は非常に一般的で見た感じ善良な一般市民。だから突然顔をあわせた生徒が俺を暴力的な人間と勘違いして財布を差し出

すわけがない。

学校も受験と学校説明会の日を除けば本日が初日というわけだし、我が校は三つの理念によって成立しています、みたいな話をすることもできない。

学費が無料というわけでもなく、学園のアイドルがどうのこうのという話ができるわけでもなく、突然食パンくわえた女の子が飛び出てくるはずも無く、そもそも本日は入学しきつすよ？ 食パンをくわえて飛び出してくるなんてどこまで計画性無いんだよ！ どれだけ朝の時間がなかったんだよ！ ちなみに二年生と三年生は本日お休みである。

佐藤は言う。

「結論から言うと永遠の命は不可能だ。仮に永遠の命を手に入れたとしても誰がその永遠の命を証明する？ 証明するためには永遠を生きなければならぬ。しかし永遠は終わりが無い。だから証明することができないわけだ。私は永遠の命ですよー、といったところでその証拠が無いからな」

俺は言う。

「そもそも永遠の命を手に入れられる薬って治験段階でアウトだろ。薬の成果を見るため永遠に付き添ってなきゃいけないわけだし。もしも本当に永遠の命を手に入れることができる薬だったら治験が終わらないよな」

落葉は言う。

「賢者の石を使えばいいじゃない。錬丹術で使うやつ」

「詳しいね妹さん。でも残念ながら現段階の賢者の石では無理だよ。錬丹術で使用する賢者の石の正体は硫化水銀であって寿命を縮めるだけだ。硫化水銀を利用したおかげで命を落とした中国の皇帝が数人いる」

「ああ、世界史の教科書の隅に書いてあったな」

「え、兄さん世界史の教科書もう読んだの？」

「完読したよ。授業の予習くらいやっつけ落葉」

「天国に行く前に予習する兄さん？」

「妹さん、右京は間違はなくレッツゴー・インフェルノ」

「本気で怖いからその会話やめてくれないだろうか」

とまあそんな会話をしていると高校が目の前に迫ってきた。高校の校門をくぐると様々な服装の生徒たちが目に入る。同じ服装の生徒は俺と佐藤程度だ。

もうお気づきかもしれないね。そう、玉川高校は私服校なのだ。制服なんて物がない。

でも、着物を着ているのは落葉くらいだ。見渡す限りの洋服。山のような洋服姿の生徒。

落葉に話しかける。

「なあ落葉。和服はお前くらいだぞ。お前浮いているぞ？」

「新しいクラスで空気みたいに扱われる予定の兄さんに言われたくないわ。いえ、空気以下ね。二酸化炭素よ」

「なんだよ、二酸化炭素って。空気を構成している代表的な物質の中で一番少ないじゃないか」

「安心しろよ右京。二酸化炭素が無ければ地球の表面温度はマイナス18度だ。それなりに役立つよ。ちなみに俺の立場は窒素かな？」

「そして私の立場は酸素よ。もっとも人間の役に立っているわ」

何故服装の話をしたら空気の話になるのか、少し疑問を抱いた。ちよつと待てよ。二酸化炭素って最近地球温暖化とかで騒がれているよな。増えすぎて困っていると言う話は有名だ。つまりなんだ、俺は増えてきていると言うことなのか？ 体重と身長に変化は無いんだけどな。いや、そもそも二酸化炭素は物を燃やしたり呼吸したりをすると発生するものであり、植物に吸収されて……（後略）

気がつくと俺たち三人は入学式に参加するため体育館の中に入っていた。頭の中で考えながら入学式の席に座る。入学式の席は男女別だったので俺は落葉といったん別れた。でもって俺は佐藤が座った隣の席に座る。

俺は相も変わらず考えていた。二酸化炭素は普通の圧力下でなら冷やすと液体を通らずに固体になるいからか。それとも量が多すぎると窒息死してしまう危険もあるからか？ 何故俺は二酸化炭素にたとえられたのだろう。ふむ、中学校卒業したてではろくな知識が出てこない。まあ、これは保留しとくか。

やっと保留にたどり着くことができた。唐突だが昔の俺の先生が言っていました「考えることをやめると脳は劣化していきます」それなので以来考えることをやめなくなってしまい今に至る。保留にするのが一苦労なんだよ。

さて、次に何故佐藤が窒素かと言う問題についてだが……これは佐藤に尋ねたほうが早いだろう。

「なあ佐藤。何でお前は窒素なんだ？ 窒素も二酸化炭素同様多すぎると窒息死するが？」

「右京、何の話だ？」

「先ほど存在感的なものを、空気を構成している物質にたとえば色々と言ったじゃないか」

「お前もう少し楽をしていいぞ。妹さんの話を真に受けていたら身が持たない」

「いや、それは分かるんだけどさ。色々疑問を持つのが少年ってやつだろう」

佐藤は苦笑した。それから組んでいた腕を解き人差し指を俺に向かって突き立てて、

「お前はもう少年じゃない。青年だ。確かに男性は女性に比べて精神の発達が遅いという話は聞いたことがある。だがな、いつまでも少年気取りはまずいぜ」

「馬鹿やろう。男は死ぬまで少年だ」

「馬鹿やろう。じゃあ聞くがお前はサンタクロースと言う名の髭を生やし中年太り第三次成長期（縦に伸びるのではなく横に広がってゆく成長期のこと。中年太りとも言う）真っ盛りの赤服の爺さんをまだ信じているのか？」

うむ、まだ夢のある子供たちに聞かせる話ではないなと思いが
ら俺は佐藤の質問に答える。

「いや、信じてない。そもそも幼稚園に現れたサンタが雇われた存
在であることも認識していた。さらに俺はサンタに少しでも楽をさ
せるためにプレゼントいらないと親に言った記憶もある」

ちなみに落葉は雇われサンタをモデルガンで脅し、あるはずも無い
玩具工場の所有権を要求していた。

「だろう。だからお前はもう青年なんだよ」

「そういわれてみれば青い猫型ロボットが出演するアニメも見なく
なったなあ。となると俺は青年か。分かった、俺は青年だよ」

「じゃあ、右京も納得したところで次行ってみよう」

なんなんだ、次って。突っ込んで欲しいのだろうか、と一瞬考え
た。出た言葉は質問だった。

「佐藤、突っ込んで欲しいのか？」

「いや、俺はふざけてなどいない。ただ入学式が始まるまでまだ時
間がありそうだからちよつとしたゲームをしようと思ったのさ」

「携帯ゲーム機なら持ってないぞ。学校という場だからな」

「そんなものはいらん。かわりにこいつで遊ぼう」

そう言う佐藤は制服のポケットからカードの束を取り出した。裏
面の印刷を見る限り遊ぶためのカードではなさそう。そして分厚
さからしてトランプでもない。なんだろう。佐藤は言う。

「タロットカードだ。占いに使われる」

「ああ、タロットカードか。悪いがそれは落葉とやってくれるか？」

俺は占いを信じるような人間じゃない」

俺の言葉を聞いて佐藤は鼻で笑う。

「悪いがお前は占いを信じざるをえない。まあ、とりあえず見てけ
そう言う佐藤はカードの一番上をめくる。そのカードに衝撃を受
けたのか佐藤は五秒間何も言わなかった。そしてカードの上下を逆
さまにすると俺に見せた。

逆さまの死神だった。

「佐藤、意味は何だ？」

「再生だよ。ちなみに正位置は死」

「お前、さっきカードを逆さまにしただろ。どう考えても正位置だよ。意味は死だ。やり直せ。今すぐやり直せ」

佐藤は頷くと死神を山札に戻しシャッフルする。

「まあ安心しろよ右京。さっきはああ言ったが俺自身占いなんて信じてない。偶然だよ」

そう言って佐藤はシャッフルをやめて一番上のカードをめくった佐藤の周囲の空気が凍てついた。ついでに佐藤も凍結した。

「おい、どうした。佐藤、応答しろ」

「右京、お前死んだぜ」

佐藤はカードを俺に見せた……死神だった。

「佐藤、タロットカードは全部で何枚ある？」

「22枚。最初の死神が22分の1で次の死神が出るためには484分の1だ」

「やり直せ。今すぐだ。さもなくば三回死刑だ」

「友のためだ。やり直すぜ」

佐藤はカードをきる。そしてめくる。死神だった。

「もはや偶然と考えるのは正しい思考じゃないな」

俺は言った。

「そうだな、お前が近い将来死……」

佐藤が言いかけたが俺が冷静かつ迅速に答えを出す。

「その山札、全部死神だろ！」

「正解。だが、二回目で気付かなかった辺りこのゲームは俺の勝ちだな」

ああなんだ、そういうことか。俺は全身の力を抜いた。

「佐藤、ゲームにしては黒すぎるぞ。もうちょつと軽いゲームは無いのかよ」

「あるぞ。最初はグー、ジャンケンポン」

声につられて俺はパーを出した。佐藤はチョキだった。

「すまん佐藤、今は調子が悪い。家に帰るころには復活していると思うが」

「じゃあ入学式と担任の先生の挨拶も終わって、家に帰ったらお前の家で将棋でもやるか？」

「望むところだ。ああ、それからここでの会話は終了だ」

「ついに始まるか、入学式。じゃあ、優等生気取っていいこうか」

俺は頷くと佐藤との会話を中断する。視線も佐藤からステージのほうへ移す。校長先生と思われる人物が演説をするためだろう。ステージの上に立っている。その証拠にマイクを握っているではないか。さて、演説を聞くとしよう。

「皆さん、静粛に。これより入学式を始めます」

ああ、始めてくれ。できれば手短にな。

「それでは、校長先生の話です」

あんたは校長じゃなかったのか。なら教頭先生だろうか。それとも平教師？

壇上に校長と思わしき人物が上がってきた。

「皆さん、おはようございます」

おはようございます校長先生。早速アンチマテリアルライフルの射程よりも長い話をするんだろう。分かっているよ。でも短いとかえって何か裏があるのではないかと怯える結果になるから長い話を頼む。でも五分以内で頼む。

校長は話を進める。

「受験は大変だったでしょう」

いや、そうでもないよ。真面目に中学生をやっていたら前期試験で受かっちゃったし。だが良く聞かいい皆の衆、真面目に生きておくと後々で得をする、と言うのは学校、特に高校や大学の面接会場だけ。社会に出たら少しくらい陰謀を持っていたほうがいいよ。犯罪的な意味で、ではない。社会的な意味で、だ。

「高校生活の3年間は合計で1095日です」

残念だけどさ、校長先生、閏年が入るから1096日だよ。

「時間にすると……」

26304時間だ。

「秒にすると……」

いいよ、どうでも。それに300秒＝5分くらいとっくに経過しているぞ。

「運動部で汗を流すもよし……」

運動嫌い。

「去年、高校文芸大会の優勝者が我が校の文芸部から出ました」

それでも作家や詩人になれる可能性は低いさ。文芸業界なめるなよ。まあ、凄くないの？ と聞かれれば凄いですと言うしかない。

「勉強と部活の両立は大変です。しかし成績が優秀な生徒の大半はどこかの部活に属しており……」

部活か……一応選択肢の一つとして考えておくのも手だよな。でもいざ部活に入ろうとすると全て面倒なものに見えてくるから困る。

その後、校長は十分近く話を続け、合唱部と吹奏楽部による校歌を聴くはめになった。予想はしていたが校歌をカラオケで歌えるわけが無いので覚えてもあまり意味が無いと思う。ただ聞く立場であるはずの佐藤が歌詞を間違えずに小声で歌っていたことに驚いた。予習済みか。

入学式が終わり俺と佐藤は体育館から解放されると、落葉が勝手に決めた集合場所に集まることにした。

落葉はすでに来ていたようでお互いの姿を確認すると手を振った。集合場所に設定されたのは高校最初のクラス分けを発表する掲示板の前だ。

しかし掲示板の前にはすでに大勢の生徒でにぎわっている。掲示板に近づくだけでも一苦労だ。だから落葉の姿は掲示板から少し離れた場所にある。

しかし着物姿だから少し外れたところにも良く目立つ。まあ、つまり現実には浮いているということだ。もっとも、スーツ姿の生徒から見れば制服姿の俺と佐藤も十分浮いているが。

まあ、何はともあれ掲示板の前にいる生徒の数が減ってきたところで俺たち三人はクラス分けを見た。

世界の中心で悲鳴をあげる佐藤の心の声が聞こえた。また佐藤にも宇宙の中心で悲声をあげる俺の姿が見えたはずだ。

これは……この現実を受け入れるには清水の舞台から飛び降りる以上の勇気が必要だ。核融合炉に飛び込む覚悟だろうか。いや、俺の体がすでに核融合を引き起こしているよ。とりあえず心臓という名の炉心は融解した。代わりに日常という名の狂気が俺と佐藤を支配している。

そんな現実を受け入れたくない俺たちに落葉のとどめが入る。

「兄さん、同じクラスじゃない。佐藤君も。一年間よろしくね」

新しいクラスに入り黒板に張り出された座席表を頼りに自分の席に座る。

「ジ・エンドった」

全てが終わった。多分今日は審判の日だ。説明しとくと『ジ・エンドった』と言うのは右京語で希望が絶えたと言う意味だ。覚えてもテストに出ることは絶対ありえないので忘れたほうがいい。ちなみに、『じゃあ何で言ったんだ？』といった質問は受け付けない。

俺は頭がズーンと重くなった。この感じ、覚えがある。佐藤とゲームで対戦しているとき、城が攻撃されているのに援軍が間に合わない……とか、佐藤の手に飛車と角が全て握られている……とか。いや、こんなものではすまない。一番近いものは小学校で作った『牛乳』と『オレンジジュース』と『お米』を一緒に炊いたものを食わなくてはならなくなったとき。うん、これが一番近い。

しかし、到底それら全てを掛け合わせたとしても到底今の頭の重さには到底敵わない。

そうだよ、中学のときは一回だけ落葉と同じクラスになった。あの時は散々だった。小学生のころはまだ可愛かったが知恵の付いた中学生は強かった。

色々あつてとある夏の日、佐藤とこんな演劇を屋上で演じる羽目になった。台本はこんな感じ。

佐藤「信じたくは……なかったよ」

俺「そうだ。俺が千夜だ。キルシンドロームチルドレンを率い超合衆国落葉に挑みそして、世界を変える男だ」

佐藤「お前は俺たち人間を利用していたのか。俺のことも」

俺「結果的に世界は解放される。文句は無いだろう」

佐藤「早くお前を殺すべきだったよ」

俺「気付いていたのか？」

佐藤「確信は無かった。だから否定し続けてきた。お前を信じたかったから。だけどお前は嘘をついたね。俺と落葉に」

俺「ああ、その落葉がさらわれた。佐藤、一時休戦と行かないか？

落葉を救うために力を貸して欲しい。俺とお前、二人いればできないことなんて……」

佐藤「甘えるな。その前に手を組むべきは妹さんだった。お前と妹さんが力を合わせれば世界は……」

俺「全ては過去。終わったことだ」

佐藤「過去？」

俺「お前も父親を殺しただろう。懺悔など後でいくらでもできる」

佐藤「いや、お前には無理だ」

俺「なに」

佐藤「お前は最後の最後で世界を裏切り、世界に裏切られた。お前の願いはかなえてはいけない」

俺「ばかめ、理想だけで世界が動くものか。さあ、撃てるものなら撃ってみろ。この、量産型ブラックボムをな。俺の心臓が止まったら爆発する。お前も学校もお終いだ」

佐藤「貴様！」

俺「それより取引だ。お前にキルシンドロームを教えたのは誰だ。そいつと落葉は」

佐藤「ここから先のことは、お前には関係ない！ お前の存在が間違っていたんだ。お前は世界からはじき出されたんだ。落葉は俺が……」

俺「佐藤！」

佐藤「右京！」

ここで俺と佐藤は剣道部から強奪した木刀を構えた。そしてあいっは現れた。

「やめて二人ともー。私のために争わないでー」

落葉が屋上に出現すると同時に叫んだ。内容からして俺たちの会話を少しも聞いちゃいないだろう。

何故こんな事になったかって？ それはね、落葉の陰謀でこんな事をしなければ俺と佐藤の成績が全て1と言う永久（とわ、と読んで欲しい）に悲しい数字に置き換えられてしまうからだ。受験シーズンだったので必死だった。平均評定確保のために本当に全力を出した。そして完璧な頭脳戦だった。勝利はこちらの手に握られたが、あの夏、神奈川県厚木市が例年以上の暑さを記録したのは俺たちの知恵熱が原因ではないかと考えられているくらいだ。

そして、落葉がどのような方法で俺たちの成績を書き換えるのか、という疑問はこの際だから割愛しよう。してもいいよね？ だって悲しくなるから。

とにかく結果として俺と佐藤の成績は守られた。また、所々に出てくる専門用語的な単語は佐藤が考えたものだ。かつこよく決めようとして失敗した感、全開。まあ、佐藤も中学生だったから中二病全開のネーミングしかできなかったのだ。勘弁してやって欲しい。てか、その中二病全開のセリフを喋ったのは全部俺と言うことに気がついた人は何人いるだろうか……。

まあ、他にも落葉の迷惑騒動は色々ある。まとめれば文庫本が一冊出来るほど。読む人はいないと思うけれどね。でも読んで欲しい。読んで俺の苦勞を分かち合おうではないか。そうは思わな

いか佐藤？

佐藤は自分の与えられた席に座っている。何かしら苦悩しているらしく、俺の視線気付くのに5秒かった。

その表情は絶望しきっていた。表情からして「鬱だ、死のう」と言っているようにも見える。頷いて返事を返す。ついでに表情に「なるようになるさ」を含めておいた。佐藤も同じ結論にたどり着いたようで軽くジェスチャーをする。

と、ここで教室の扉が開く音がする。クラス全員の視線が開いた扉に行く。生徒たちの期待に応えるかのように大人の女性が一人、紙の束を抱えて入ってきた。女性は教壇に立つと、

「はい、全員席についていますね。じゃあ始めたいと思います。これから長い一年間、皆の担任になる清水蒼しみず せうです。よろしく願います」

担任を名乗った女性の名前は清水蒼。趣味は子供たちの教育。担当教科は英語。カウンセラーもやっているという。昔は小説家を目指していたが挫折して教師の道を選んだと言う。最後の一言で清水先生は言った。

「小説は書くものではなく読むものですね。と言うわけで今度は皆の番です」

そう言うとき先生は抱えていた紙の束を数枚めくって一番前に座っている生徒たちに配り始めた。後ろに回してくれという暗黙の了解をキャッチした生徒が紙の束を後ろの人に手渡す。枚数を減らしながら一番後ろの人まで紙が回る。勿論俺のところにも来た。

すぐに内容を確認する……なるほど、予想はしていたがやはり自己紹介をするためのプリントか。

俺は筒型の筆箱からペンを取り出すとプリントに記入をしていく。難しい質問は無くスラスラいけた。

最後の項目までたどり着くまで1分とかからない。しかし、最後が難問だった。

言うなれば、日頃の真面目さが裏目に出た、と言うべきか。いや、

子供にとって最大の難問を先送りにしてきたから、と言っても正しい。

さあ、最後の項目には何と印刷されていたでしょう。答えは来週お伝えします。

.....

速やかに現実に戻るか。なにに、将来の……夢？　ぐふっ、俺みたいにテキトーに生きているとこういう、先送りにしている項目だよ、これ。しかも俺は中途半端に生真面目だからスルーするってわけにもいかないから悩んでしまう。

幼稚園児なら『電柱の上のほうに乗っているあれ（変圧器）を作る人になりたいです』なんて事を書いておけば先生も見逃してくれるんだけどなあ。

他の生徒は続々と書き終えて先生に自己紹介プリントを提出している。焦る俺。そうだ、この項目を無かったことにすればいいんだ。鉄でこの項目を切り取ればいい……残念だ、鉄がない。

くそう、佐藤から借りよう。俺は佐藤に視線を送る。すぐに気付いた佐藤は鞆の中を漁り、鉄を取り出した。俺は絶望した。佐藤が取り出したのはシュレッダー鉄と呼ばれるタイプのものだったからだ。これで紙を切ると、紙はシュレッダーにかけられた後のように細長く処理されてしまう。

やっぱり落葉から修正液を借りよう。俺は振り返り落葉に話しかける（名前順に座ると俺の後ろは当然落葉だ）。

「落葉、修正液を持っているか？」

「兄さん、貸して欲しいと言うつもりだと思っただけ、修正液の一度使った液は乾燥して二度と使えなくなるのよ。つまり……」

「持っていないんだな？」

「うるさい」

すねた落葉。

「まだ書けてない人はいますかー？」

先生が確認を取る。俺は素直に手を上げた。と言うか白旗を揚げた。戦争とかやるときは、機関銃のほかに白旗もちゃんと量産しとけよ、いろんな国家の軍事担当さん。でないと白いシャツを着ているを探すことになるぞ。

「えーと、君の名前は……」

清水先生が名前の確認をする。反応からしてまだかけていないのは俺だけと見える。

「あ、秋山右京君ね」

「はい、そうです。すみません」

素直に謝った。素直な子供は大人も扱いやすいだろうから素直な子供を気取っておく。大人への健気な気遣いのつもりだ。しかし先生から返ってきた言葉は意外なものだった。

「それじゃあ、一週間後の月曜日までに提出してもらえればそれでいいですよ」

「無理です。最後の将来の夢と言う項目があまりにも難関です。あなたは一週間で将来の夢を決めろと言うんですか？」

「え、えっと、その」

いきなり俺が気迫をこめて言葉を放ったのが原因か、先生はビビッていた。すぐさま謝る。

「すみません。一週間以内に決めてきます」

「そ、そう。それじゃあお願いします」

「ありがとうございます」

こうして、俺の自分探しの一週間は始まった。

2日目 火曜日。

朝、右京と妹さんと共に学校へ行った。今日は身体測定だったの

で女性である妹さんとは別行動。

そして妹さんが消えたとき右京は文字がプリントアウトされた紙束を渡してきた。「読んでくれ」と言う言葉と一緒に。俺は快く了承した。

放課後、約束どおり家に帰って原稿を読んだ。

そして右京から渡された原稿を読み終えて俺（佐藤陽太郎）は言った。

「コメントのしようがねえ」

返事は返ってこない。当たり前だ。今日の前に右京はいない。代わりにパソコンがあるだけだ。だから俺はパソコン（正確にはチャット）に文字を入力する。

『なにこれ？』

返事はすぐに返ってくる。

『いや、小説だけど』

返事を書く。

『What is this?』

『This is novel.』

『右京、法の書って知っているか？ あっちのほうが読み応えあるぞ』

『お前読んだの？』

『濃い内容だった。意味不明だった』

『いつ読んだ』

チャットなので右京の様子は視認することはできない。しかし、相当焦っていることだろう。だから素直に返事をする。

『9ヶ月前だ。すなわち、そろそろ災厄、大戦争、天変地異が生じる可能性がある』

返事が来ない。追加で入力する。

『どうした、本来農協なら何か言うはずだぜ。それとも焦っているのか？』

『農協ってなに？』

『変換ミスだ。本来の右京なら何か言うはずだぜ?』

『そうだな。てか、そんなことはどうでもいいんだよ。小説の感想を言え』

と言われても感想なんて一切出てこない。だから適当かつ正直に、

『俺の名前の紹介、最初のやつ、漢字間違っているぞ』

返信は来なかった。多分フォルダを開いて書き直しているのだろう。と言っても、俺を陽太郎と呼ぶ人はまだ登場していないからぎりぎりセーフだったな。

しばらくして返信が来る。

『治したぞ。友人の名前は佐藤陽太郎、に』

『ああ、サンキュー』

『他に言いたいことはあるか?』

『お前、治したぞって書いてあるぞ。正確には直したぞ、じゃないか?』

『チャットのことはいいいよ。お前だって変換ミスしただろうが』

『そうだな。こんなことしていたら前に進めない』

『それで、他に言いたいことはあるか?』

『少し考える時間をくれ』

俺は考え始める。さて、初心者が書いたにしては悪くない。そこらへんに転がっている下手なネット小説よりは出来がいい。ちなみに俺は携帯電話を持っていないので携帯小説がどんな感じかは分からないのでそちらに関してはノーコメントとさせていただく。とはいえ出来がいいとは言えない。

で、肝心な感想は……とその前に、

『お前、俺のプロフィールとか全然分かってないよね』

『お前のプロフィールを完璧に書いたら読者がひくだろ』

『なんだとこのロリコン!』

『うるさいオカルトマニア!』

俺は即座に次の文章を入力する。しかし右京のほうが早い。

『ロリのどこが悪い。人間っていうのは生理学的に幼い子供を一番

美しいと感じるようにできているんだよ。ロリコンじゃない一般人が異常なんだよ!』

かまわず俺は作った文を送る。

『分かったよ。やってやる。アブラメリン魔術を実行してやるよ。

ホーリー・ガーディアン・エンジェルが出てきたら写真とってお前に見せてやるよ。二十一世紀の魔術師としてデビューしてやるよ』

『なに、そのアブラメリン魔術って?』

なんだ、そんなことも知らないのか。やれやれ、これだから素人は困る。

『アブラメリン魔術と言うのは春分から秋分までの六ヶ月間、肉を食べない、太陽が出ているときに眠らない、病氣治療以外の目的で外出や投薬をしない。さらに慈善や物乞いには快く応じなければいけない。そして一日二時間以上は聖なる書物を読まなければならぬ。これを実行すると聖守護天使が現れて銀の皿にメッセージを書くわけだ』

……右京からの返事が来ない。

『おい右京。どうした?』

返事は無い。

それからほんの少しして家のチャイムがなる。誰だろうなと思つて家の扉を空ける。

「千円ちょうだい」

右京がそこにいた。

「分かった。しばし待て」

俺は自室に戻り机の引き出しを開けて千円を取り出す。右京の待つ玄関へ行き、

「どうぞ」

千円札を差し出した。

「いや、ちょっと待てよ。お前本当にやる気かよ?」

「勿論だ。世界中の魔術を信じない愚民どもに魔術の力を見せてやる」

右京は何も言わずに帰宅した。俺の家はマンションで右京は隣に住んでいる。だから右京が帰宅する様子はリアルタイムで見ることができる。

さて、右京が帰ったから準備をするか。まず銀の皿……ステンレス製のあれで代用するか……とか言い出すだろうと思った人は甘い。銀の皿ならこういうこともあるうかと、すでに用意できている。それから霊媒とする思春期前の子供だが……まあ六ヶ月もあれば中国のネットオークションで落札できるだろう。次に聖なる書物だが、旧約聖書と新約聖書があったな。コーランは持っていないが、通信販売で手に入ればいいだろう。

「そうか」

俺は小さく笑う。そうだよ、通信販売というものがあるから現代においてアブラメリン魔術は簡単な魔術になっている。家から出なくても通販さえあれば生きていけるからなあ。アマゾン最高！ただ北海道のお土産である白い恋人を購入できるポイントに関しては減点対象だ。

俺は自分の部屋の物置から銀の皿を取り出した。机の上にそれを置く。

とその時、机の上に放置されたペンが浮いた。そして銀の皿に文字を書き始めたのだ。書かれていく文字を読み上げる。

「そ…ん…な…こ…と…し…て…な…い…で…が…く…ぎょ…う…に…は…げ…み…な…さ…い…い…」

『そんなこととしてないで学業に励みなさい』

そ、そうか。天使は魔術よりも学校で習う実社会で役に立つ知識を求めなさいと言っているのか。なんと反抗期全開の子供がいる母親のような一言だ。でも素晴らしい教えだ。

早速右京に見せに行こう。と、ちょっと待て。この筆跡、どこかで見たことがあるんですけど。この字は……かない様の字だ！右京の回し者だったのか。くそう、確かに彼女ならば姿を現さずペンを持って文字が書ける。

よし、早速右京を潰しにいこう。魂すらも残さない。

「右京、そこにいるのは分かっている。かない様に文字を書かせたんだろ」

「かない様、ご安心を。あのペンは水性なので皿に書かれた文字は簡単に落とせますから」

かない様が俺の後ろから横に回りこんでくる。様子からして俺の怒りを静めようとしているようだが、もう遅い。

「う、うん、見えるわ。とっても優しい赤ね」

実際にやってくれるかない様に感謝しつつ、

「俺には優しい色に見えないんだよ。今すぐ右京の部屋でヌンチャク乱舞をやれと血潮が！ 魂が！ 俺に命じるんだよ！」

「俺はイスラム教徒じゃない！」

かない様は恐らく話題を変えようとしたのだろう。だがその手は俺に通用しない。

「あの文字、
かない様が書いたものですよね？」

「そうだけど」

「内容は誰が考えたのですか？」

「私だけど？」

あああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああ

あああああああああああああああああああああ

俺は猛烈に出来ない様へ謝罪の言葉を送る。

職後にやります。どうかお許しを」

「頭を上げなさい。私は貴方の無礼を許します」

だ。この神様は神様モードになると本気で神様だから崇拜せざるをえない。

「神にすがりつく人間か。情けないぞ佐藤。自分の道は自分で切り開かなきゃ」

「なんだとオカルトマニア。お前こそ幼女の貴重さが分かっているのか。それからこの千円札返す」

「構わないぞ。むしろ望むところだ」

会的であることにかわりはないと思うけど」

二人で謝った。

「少し待っていてくれ。お茶でも淹れる」

俺は先ほどの激しい感情は捨てて今回の対局はどう進めるかを考

えていた。だがその前に説明しなければならないことがある。かない様だ。

外見から先に説明しよう。日本人風な顔立ち。腰まで届く夜色よりも黒い髪。その髪の一部は窓の外から入ってくる日光によって夜空に輝く月のごとく光っている。そして黒曜石のような瞳。完全にアジアンビューティーと言う言葉がとても似合う女性だ。大人の美を身にまとってはいるが子供っぽさを隠しきれてはいない。身長は俺と同じくらいの170センチメートルくらい。

服装は水色の和服。帯は白だ。季節によって服装を変えているらしく俺が初めてかない様を見たときには白い着物の所々にあやめの花柄を持たせた着物姿だった。

ちなみに俺と右京とかない様の出会いなのだがこれも結構複雑。始まりは初詣の日だった。右京は誤って一万円札を賽銭箱に入れてしまった。それが原因でかない様は右京が認識できる存在になった。その後いろいろあり俺にも見えるようになったり一般人にも見えるようになったりした。

かない様は神様だが力はほぼ失っており今では俺にだけ姿が見えるようになる状態から一般人にも姿が見えるようになる状態を行き来するくらいしかできない。あとかなり無理をすれば炭素の塊をダイヤモンドに変えられる。こんなところだ。

で、問題はここからである。かない様は神様なのだ。一般人にはとても信じてもらえないが 実際かない様は神様なのだ。

昔はそれなりに信仰を集めていたらしく山とか動かせたらしいが、神様と言う文化が薄れてしまっている今の日本で信仰を集めるのは難しく今のところ信者は俺と右京だけとなっている。

だから今使える力は限られている。唯一使える能力は、自分の姿を他人に見せられるようにする、という力だ。それ以上の力を使うと疲労で倒れてしまう。俺も右京もかない様が倒れる姿を正直見たくない。それをかない様も分かっているのだろう。神様のな力は緊急時を除いて今のところ使っていない。

もう少し詳しくかない様を説明すると、彼女は弥生時代生まれです。そのとき不死の呪いをかけられて気がついたら神様扱いされていてさらに気がついたら本当に神様になっていたようです。だから年齢は1000単位。そして本人も年齢を数えることをやめている。神話の中にも人間から神様になった人とか結構いるからね。だから不思議には思わない。

それから神様なりの悩みもあるらしい。しかも自分から打ち明けられるタイプじゃない。だから右京がその洞察力でもって悩みを見抜き俺に相談してくる。この前は不老不死を治すにはどうすればいいか。と聞いてきた。この質問はオカルトマニアである俺でも答えに困った。何故って、不老不死を手にいれた例があまりにも少ないからだ。つまりその逆はもっと少ない。てか、分からない。だから答えられない。やれやれ、右京の相談はいつもこうだ。

それから現在の生息地ですが……右京の部屋です。右京と同居しています。一つ屋根の下どころか一つ部屋の中です。ただしそこからラブストーリー的な展開になることは決して無いだろう。だって右京はロリコンだから。

あの、一つ言っておきますけど、かない様は俺たちよりも見た目の年齢が上ですよ。恐らく20代前半くらいと思われる。しかも妹さんよりもグラマーな体の持ち主。よって右京はかない様に手を出さない。それどころかこの前右京が俺の家にやってきてこう言った。「なあ、どうして俺の周りってこう年上キャラばかり集まるんだ？」答えはこうだ。

「安心しろよ。妹さんと言う年下キャラがいるじゃないか。むしろかない様くれないか？俺年上が好きなんだ」

さて、そろそろ右京がお茶を淹れ終わる頃だろう。と言うわけでそろそろ今回の作戦を練らせてもらおう。と、その前に……なんで将棋板が9×9じゃ無くて12×12なんだ。

「お茶淹れたぞ。緑茶でよかったよな」

右京がキッチンから戻ってくる。

「勿論茶葉は玉露だよな？　それから右京、何かおかしくない？」
「何が？」

「ちよっと待ってくれ右京君。いつもは俺がぼけ役でお前が突っ込み役だろう」

「本題に入ってくれるか？」

「これ将棋じゃないだろ」

右京が先ほど持ってきた将棋板もどきを指差して言った。

「ああ、それか。それは中将棋ちゅうしょうぎと呼ばれる将棋の一種だ」

「あ、確かにそんなゲームがあったな。じゃあやるか」

右京が一瞬固まった。そしていつもの突っ込み役モードに変わる。

「ちよっと待てよ。もう少し戸惑えよ。そもそもルール知っているのかよ。見たことの無い駒ばかりだろう。それからどうして中将棋なんてやるのかとか聞いてくれよ」

「分かった。じゃあどうして中将棋なんてやるんだ？」

「焼き払われたんだよ……普通の将棋が」

一瞬大気が固体になったような感触に襲われた。俺はその固体を何とか砕くことに成功して、喋る。

「なにそれ」

「昨日俺が佐藤に連勝してお前が帰った後。落葉がやって来たんだよ」

「なるほど、それで焼き払われたんだな。で、理由は。何の理由もなしに焼き払うような妹さんじゃないだろう。なんかしら理由を言っただけじゃなかったか」

右京は重そうな口を開く。

「ああ。俺と佐藤が古臭いゲームにはまると自分と遊んでくれなくなるのではないかと恐れた、という理由で焼き払っていった」

「奇遇だな。俺はチェスを同じ理由で持ち去られたぞ。昨日」

「落葉が昨日お前の家に行ったのはそれが目的か」

俺と右京の間に重たい空気が流れる。ひょっとしたら周りの空気が全てラドン（単体かつ常温で最も重たい気体）にメタモルフォー

ぜしたのかもしれない。

俺は恐る恐る空気を吸った。もし吸った空気が大量のラドンならば無事ではすまないはず。しかし俺の体に異常は無い。どうやら思い違いのようだ。何故か右京も空気を吸ったりはいたりしているのが気になるが、そろそろ、みそろそろ本題に入ろう。

「右京、これ、中将棋ってどうやってやるの」

「これから学ぼう」

「見たことのない駒だらけだけど、どうやって動かすの」

「調べてみよう」

「何でこんな古臭い代物があるの」

「押入れを漁っていたら出てきた」

知らないとか、分からないとか言わないあたり右京は誠意を持って答えているのだろう。うむ、やはり右京は真面目な人間だ。それに比べて近頃の若者は……という内容に話が進むと長くなるのでカット。

「じゃあ、調べようか、ネットで」

前向きな意見を右京は述べた。しかし俺は賛成しなかった。

「なあ右京。今気付いたんだがお前が持ってきた湯飲み……三つあるぜ。俺と右京と、あと誰のぶんだ？」

「かない様のだよ」

「予想通りだ」

「なら質問する……なるほど、その手があったか」

「念のために質問するが今親はいるかい。妹さんは？」

「両方いないぜ！」

「よし、かない様にやり方を聞いてみよう。長い歴史の中で一回くらいはやったことがあるかもしれない」

「よし、呼んでくるぜ」

「ここにいるけど？」

突然かない様は姿を現した。見慣れていないものにとってはちょっととしたホラーだがもう慣れっこだ。

「とりあえず並べ方から教えるね。仲人がこことここ。その後ろが全部歩で、その後ろが……」

数分が経過した。その結果、俺と佐藤が初心者チームとしてタッグを組んでかない様に挑む、という形になっていた。

「さあ二人とも、かかってらっしゃい」

「じゃあ、遠慮なく」

右京が言う。俺も続けて、

「お願いします」

「それじゃあいくわね」

かない様は獅子の前にあった歩兵を前に出した。ほう、いきなり攻撃的な手を使ってくるか。

「どうする右京？」

「どうって、とりあえずいつもの将棋を参考にやっていくしかないだろう」

「角が今のところ動けない状況となると、やはり飛車か」

「そうだな。左側の飛車出すためにその前にいる歩兵を動かそう」

かない様がいきなり獅子を前に出せる状況を作り出したことを考えると攻撃型の戦法を取ることは容易に想像できる。しかし中将棋は将棋と違って駒が多いので王将の守りが最初から強い。だから少々攻撃されても、それを無視して攻撃で問題ないだろう……というわけにもいかない。中将棋は持ち駒と言う概念がないのだ。つまり一度取った駒をもう一度使うことはできない。どちらかと言うと感覚はチェスだ。

悪いねかない様。俺は将棋よりチェスのほうが得意なんだ。そこに右京が加われば俺の欠点を補うことができる。この勝負、もらったぜ。

結果から言おう。右京が降伏した。そして勝った。かない様と俺の連合軍が。

「右京君は強いわね。だからもう勝てないと悟ったんだわ。それで

降参したのね。本当に右京君は凄いわ。初めての中将棋でここまでできるなんて」

「なにを言っているのですかかない様。右京は日々俺と対戦して脳を鍛えているんですよ。弱いわけがないでしょう」

「いえ、かない様。俺よりも佐藤のほうが頭いいですよ。ゲーム序盤でかない様に加勢した方が勝てる俺より先に読んだ訳ですからね。二人で知恵を絞っても勝てないと俺よりも先に悟ったわけです」「そうね。右京君は陽太郎君に一本取られたわね」

さすがかない様、戦国時代をリアル体験しただけのことはある。普通の人はチーム戦をやっているとき、相手チームの一人が「こちら側に加勢いたします」と言われても、受け入れずに「帰ってください」と言うはずだ。

しかしかない様は使えるものは何でも使う。ルール違反じゃない限り使う。敵の兵士が大将を裏切ればこちらの駒として使う。しかしこれでは軍の忠誠度が下がる。確かに歴史を振り返ってみてもかの偉大なチンギスハーンは敵の大將を裏切ってチンギス軍に加勢しようとした敵の家臣を迎え入れずに殺していたらしい。しかし今のような状況なら俺を信じて問題ない。

だが、かない様のお説教に対する免罪符は現在発行されていない。だから俺は、これからかない様のお説教を受けることになるだろう。右京を裏切ったその罰として。

「勝っちゃったけど、陽太郎君？」

「な、なんでしょか」

「友達を裏切るなんて酷いじゃないの。この前テレビの3チャンネルで見たけど友達って言うのは助け合うものじゃないの？ 陽太郎君と右京君は親友関係でしょう。だったら助け合いなさい」

おお、ありがたい。神のお導きだ。正直言うと中将棋に勝つためじゃなくて、これが聞きたいがために右京を裏切ったんだよね。右京≤越えられない壁≤俺≤かない様

まあ、右京も幼女と戯れたいために中学生一年生時代、職場体験

学習という授業の一環で小学校に行ったことがある。そして中学二年生時代、今度は幼稚園に行った。そんな右京が今の俺を否定できるはずがない。

かない様のありがたいお説教を真面目に聞いている俺。しかしそんな平穏な時間は過ぎ去ってしまった。誰かが秋山家の鍵を開けているのだ。音からしてピッキングではなくキーを使って空けているのだろう。それを察知したかない様が湯飲みをテーブルの上に置いて姿を消した。

右京が帰ってきた家族を出迎えに行く。その間に俺は中将棋をスタートの状態に戻すことにする。

「お帰り落葉」

右京が俺にも聞こえる声を玄関で発音した。音からして帰ってきたのは妹さんだ……まずい、妹さんに中将棋が見つかるとまた焼き払われる。急いで隠さなければ！

俺は辺りを見回す。よし、あの液晶画面の後ろにこいつを隠そう。駒と板を持って液晶画面に歩み寄り後ろに置く。

しまった。液晶画面の後ろに入らない。通常より大きい中将棋板は普通の将棋より広い。だから入らないのだ。

そうこうしているうちに妹さんがリビングにやってきた。

「あ、佐藤君いらっしやい。何してるの？」

リビングデットの呼び声とはこのことか。すまん右京。この中将棋は一分以内に二酸化炭素を盛大に出しながら景気よく燃える事になるだろう（そういえば右京も二酸化炭素って単語使ったよね）。

妹さんは俺の手に行っているものを見て、自室へ向かった。リビングに帰ってきたときには、手に斧という名の凶器を持っていた。十分後。

「右京、現実逃避していいか？」

「いいぞ」

と言われても現実逃避するネタがないので今日の妹さんの服装について語ろう。赤と黒で配色されたドレスだった。不思議の国のア

リスに出てくるランプの女王を思わせる。さらにロングスカートの黒い部分には赤いハートとダイヤのマークが縫い付けてあり、赤い部分には黒いクローバーとスピードが縫い付けてある。

正直、可愛い。しかし手にしている斧とのギャップ更に妹さんの恐ろしさを強調している。

そして足元にひれ伏すは、原形を失った中将棋の板と駒たちだった。

現実逃避終了。

3日目 水曜日。

12時17分。玉川高校学生食堂。

券売機に300円を入れてカレーのボタンを押す。それと同時に昨夜佐藤から渡された小説の感想をまとめ終える。そして言った。

「キャラクターの性格がそれなりに忠実だな。まあ、人間として誇れるものではないけれど」

と、俺（秋山右京）は言った。反応するは佐藤。

「なに、実際にあったことをそのまま書いただけさ。絵と同じように小説もモデルがいると非常に書きやすい。空想する必要がないからな」

「まあね」

佐藤は自分のお金を入れてカレー券を買った。カレーのほかにか文字が印刷されているが何かまでは分からなかった。まあ、食事を始めてれば嫌でも分かるか。

で、俺の感想をもらった佐藤は不満そうだった。

「どうした佐藤。もう少しまともな評論をしたほうがいいか？」

「ああ、頼む」

「承知した」

佐藤がその気ならこちらでも本気でクレームをしよう。

「じゃあ一つ目。この『あ』の連続はどうにかしたほうがいいと思うぞ。いくらアマチュア作品だからってページ数を気にせず進めるのはまずいだろ」

「いや、プロ作家もよくやるけど」

「たとえば誰が？」

「時雨沢恵一とか」

「手抜きだね」

「ああ、手抜きだな」

「そしてお前は手を抜いたんだな？」

「イエス……」

「……」

しばしの沈黙

さて、次のクレームと言うか質問だ。

「この話のジャンルは？」

「ファンタジーだね。だって神様出てきているし」

「俺たちの人生っていつからファンタジーになったんだ？」

「かない様がお前についてきた瞬間から」

「あ、そう」

つまり、俺が悪いと言うことか。

「まあいいや、それと佐藤、お前かない様についてどれくらい知っている？」

「ほとんど知らないよ。右京のほう詳しくだろう」

「そうだな、正直いつかかない様について詳しく説明した小説を書かなければならないだろうな」

「まあ、二人しか読者がいないから誰かが困るわけでもないけれどもな」

さて、次のクレームだ。

「お前、この話をギャルゲのような話にしたいわけ？」

「へ？」

「まず妹がグラマーなボディの持ち主とか女性の神様と同居しているとか、どこからどう見てもギャルゲのような話だろ。かない様とのラブストーリー展開はありえませんかよって、俺の死亡フラグか？」
「でも俺たちの日常を忠実に再現したらまさにこうだよな」

「まあ……ね」

「それから第一章で妹さんをグラマーなボディの持ち主と書いたのは他でもない右京じゃないか」

「まあね。でもそのおかげで俺は落葉に惚れられているのに、惚れ返さないわけだ。ぎりぎりのところで踏みとどまっているわけだ。ロリコンとして巨乳の人間を好きになるわけにはいかん」

「それだと余計にギャルゲっぽくない。お前の人生」

「いや、落葉からしてみれば少女漫画だよ。だって落葉はお前にも惚れているのだろう？」

落葉がいたら絶対にできない会話だ。ちなみに落葉は今教室で黙々とお弁当を食べている。我が玉川高校ではお弁当を持っていると学生食堂の椅子に座れない決まりになっていると先生が注意を呼びかけていた。学食を利用している方々の席を確保するためだと思う。まあ、何はともあれ母さん、今日落葉の弁当を気まぐれで作ってくれてありがとう。でも俺のお弁当はないんだね。少し悲しい気がするよ。

俺はカレーを食道のおばちゃんから受け取ると空いている席に佐藤と向かい合って座り食事開始。

「質問なんだけどさ」

座るといきなり佐藤が尋ねてくる。

「なんだ？」

「妹さんって右京と俺、どっちが好きなの？」

ダイレクトな質問だ。本当に落葉の前じゃできない会話だな。まあ、誠意をこめて答えよう。

「佐藤なんじゃないか？ 中学生の頃告白されたって言っていたじ

やないか」

「俺は右京だと思うよ。小学6年生の11月頃告白されたって言うていたじゃないか」

「まあ、告白されたときショックで気絶したけれどね」

「俺はなんて言ったら良いか分からずに3分間ほど心の中が真冬の南極点と化したよ」

ため息を付く俺。つられて佐藤もため息。

「で、結局右京はなんて返事をしたの？」

「法律的にまずいだろ……と。そういえば落葉の性格が悪くなったのってあの頃からだったな。ちなみに佐藤はなんて返事したの？」

「さて、なんて言ったのだろうね。これは語られない真実だ」

「言いたくないなら言わなくていいよ」

「感謝する」

そう言うって佐藤はカレーを食べた。

ところで気になることがある。

「で佐藤。話は変わるがお前って月々のお小遣いっていくらだ？」

「食費込みで一万円」

「なるほど、この前聞いたときと同じだな」

「俺の小遣いは株価や日経平均と違って、そう簡単に変動するものじゃないぞ」

「まあ、それは分かっているよ」

「分かっているなら聞かないことをお勧めするぞ」

「ああ、分かっている。で、本題だが、お前、今なに食べている？」

「サラダ付きカレー」

「何で俺と小遣いの額が同じお前が80円高いサラダ付きカレー食ってんだよ」

「いいじゃん、別に」

こいつ、分かっている。俺は少々声を荒げる。

「佐藤、お前お金を計画的に使う知識とかこの前俺に披露したよな。疲労するほど」

「面白くないぞ」

即座に突っ込まれた。少々手痛い、が俺は怯まない。

「お金を計画的に使わなくて大丈夫なのか？ サラダ付きカレーなんて食っていると後々お金が足りなくなつて昼休みに何も食えないなんて事にならないのか？」

「お前が言いたいことはわかった」

「じゃあ明日は80円安いメニューを食べるか？」

「いや、それはない。てか、お前には見落としがある」

「ほう、何かね？」

「それはシンプルな答えだ」

「確かに俺は佐藤が無計画に金を使う様を見ることは永久に無いと思っている」

「まあ、それは正しいな。現実俺は無計画にお金を使っているわけではない」

「となると……まさかお前！」

「お前、適当に『まさかお前！』って言っただろ」

「それはともかく真実を教えてくれる？」

「バイト、しているんだ」

俺は自分の耳を軽く叩いた。そして、

「悪い、もう一度言ってくれるか」

「だから、バイトしているわけだ。でもって今日が給料日なの」

「嘘……だろ？」

「本当だよ」

俺は耳どころか全身の感覚神経を疑い始めた。多分、これは夢だ。「悪い、もう一度言ってくれるか？ 自分の耳が疑わしい。それどころか、自分がここに存在していると言う実感すらない」

「俺が魔よけに銀のナイフを常に持っているのは知っているな？」

「銃刀法違反に引っかからないよう3センチメートルのものを持っているのを知っている」

「上出来だ。じゃあ、指出してくれる？ 切るから」

「ああ」

俺は佐藤に人差し指を向けながら腕を伸ばす。そして佐藤は手際よく俺の爪の先端を切った。切れた細長い爪は先端を尖らせている。でもって佐藤はその先端を俺の手のひらに突き刺した。

「いてっ」

俺は佐藤が聞こえるように言った。

「実感わいた？」

「ああ。おかげさまで」

「じゃあ話の続きだ。俺はバイトをしている。何か質問は？」

いや、一つしかないだろ。と思いながらも質問する。

「どんな仕事しているの？」

「スパイ」

佐藤はカレーを食べ終えてサラダにフォークを伸ばしていた。

「スパイ？」

「そう、スパイ」

「すまん佐藤。今度はざっくりと頼む」

俺は自分の手のひらを佐藤に伸ばす。

「お前は俺を犯罪者にしたいのか？」

「いや、そういうわけじゃないけれど。で、スパイって、どこの国の？」

「超合衆国落葉」

飲んでいた水を噴き出しそうになった。なんとか胃の中にそれを流し込んで答える。

「お前、マジで言っているのか」

「給料いいぞ。月給千円だ」

「安いな。いや、先入観を持つのはよくないか。仕事内容を聞いてから判断したほうがいいな。で、仕事内容は？」

答えによっては水を噴き出しかねないのでコップには手をつけない。

「……右京の観察」

肺の中の空気を盛大に噴いた。

「雇い主は誰だ？」

「妹さん」

噴くものが無くて苦しくなった。

「念のために聞いておくけれど超合衆国落葉ってなに？」

「妹さんが日本の法律に縛られるのが嫌で勝手に日本から独立したのが超合衆国落葉。現在の国土は妹さんの部屋のみ。妹さんの部屋に入ろうとすると入国料を取られるのはそのためだ。独立宣言は小学6年生の12月に手紙で日本政府に送ったそうだ」

「そういえば落葉のやつ、小学校の卒業文集に『もう政治家をやっています』と書いていたな」

「ちなみに俺は日本国民じゃないから。バイトするために超合衆国落葉の国民になったから。毎月税金として500円取られてるから」
「つまり毎月500円得するわけだな」

「その通り」

やれやれ、落葉は一体何を目的に国なんか作ったんだか。てか、相当日本に依存しているよな、超合衆国落葉。落葉のやつメシとか食べに食卓へ普通にやってくるし。

ここで俺はカレーを食べ終えた。佐藤もサラダを完食したようだった。最後にコップの中の水を全て胃に流し込み昼食を終えた。

「佐藤、評論の続きは教室でしようぜ」

13時00分。玉川高校1年1組教室。

「と、言うわけでこれからクラス対抗騎馬戦の作戦会議を始めます」

と、清水先生は言った。本日最後の授業だった。

「先生はこんな作戦を考えてきました……」

「私に従いなさい。従えば勝利をくれてやるわ」

先生の声をさえぎり誰かが名乗りをあげた。その声は真後ろから聞こえたものだった。背筋が凍りつく。だが背後の燃え盛る火災（俺から言わせてもらえば火災地獄）に溶かされるのは時間の問題。相変わらず恐ろしい妹だ。

「先生、これは生徒の為の催し物でしょう。だったら生徒が作戦を一から考えるべきだと思います。違いますか？」

先生、反対意見をお願いします。あなたが最後の希望なのです。さあ、救世主的な一言を！

「そうね。正直先生もまともな作戦を考えてきたわけじゃないし。じゃあ若い力に期待します」

世界が滅び行く様を俺は見ているのだろうか。このままだと死者が墓場から蘇り農地を荒らして世界が食糧危機になる。救世主は……諦めた。

しかも普通の人間にはできない。しかし落葉ならできる。負けそうになったとき亡霊の大軍勢を召喚し、援軍とするなんてことが。

俺は頭がズーンと重くなっていくのを感じた。このお話が普通の学園生活にちょっと恋愛が入った話ならまだ亡霊の援軍は来ないだろう。しかし俺はかない様と言うファンタジー全開のキャラクターに会っているのだ。幽霊が絶対に出てこないなんて言う事はできない。

そんな暗くなっている俺を無視して落葉は太陽の400倍の大きさはあるような天体のごとく輝きだした。

「先生、ありがとうございます。それじゃあ佐藤君、作戦の説明をお願いします」

しかも佐藤が説明するのかよ。

「よし、作戦を説明します」

佐藤は鞆を持って立ち上がりDVDを取り出した。そのまま教室の片隅においてあるテレビまで移動してDVDを挿入する。

「ではまずこのムービーをご覧くださいさる前に右京、お前に指令だ」すかさず両耳を手で塞ぐ。

「聞こえないーい。僕には何にも聞こえていませんよー」

「このままだと騎馬戦大会で負ける可能性がある」

それはない。佐藤の作戦力はいくらもないほど高い。集団戦で佐藤を敵に回すとまず勝てない。だから俺は、

「聞こえないなあ」

の一点張り。しかし次の佐藤の一言で全ては変わった。

「マリファナ事件。あれが再び起こる可能性がある」

「佐藤、何でも言うてくれ。俺にできることなら何でもしよう」

説明しよう。マリファナ事件とは、落葉のチームがクラス対抗ドッジボール大会で最下位になってしまったその日の放課後、俺の下駄箱から大量のマリファナと思わしき白い粉が大量に発見された。

第一発見者はこの俺、秋山右京。

俺は慌てず騒がず先生が駆けつけてくる前にそのマリファナを全て回収。それらを家庭科室に運びその冷蔵庫の中にあった材料でスポンジケーキを作り上げた。

これによりマリファナと思わしき白い粉がマリファナではなく小麦粉であることが証明された。そして俺はそのケーキを料理部の皆及び佐藤と落葉にふるまった。また落葉のケーキに軽い自白剤を入れるのを忘れなかった。一件落着。

その後、体調を崩した落葉が保健室に運ばれて俺が看病するという地獄のような構図に陥った。

という状況にならなかったとしてもマリファナもどきで俺の社会的立場は非常に危ないものとなっていただろう。

説明はこんなところにして佐藤の話を聞こう。

「右京、教室の一番後ろに座っている天然パーマ男をちょっと捕まえてくれ」

「分かった」

俺は椅子から立ち上がりその男の前に立った。

「な、なんでしょう」

その生徒はうろたえた声を出す。

「すまん、こうでしないと俺が危ないから」

「そ、そうですか」

天然パーマが納得したようなしないような返事を返すと佐藤は言った。

「右京、その男はこのクラスの生徒じゃない。恐らくスパイだろう」
お前もスパイだろ、と言いたくなかったが堪えた。佐藤は自分がスパイであることを俺に教えた。つまり落葉を裏切ったということに等しい。スパイする対象に自分がスパイだと喋ったならなおさらだ。だから俺は佐藤がスパイであることは言わなかった。代わりに俺は天然パーマに尋ねた。

「名前はなんていうの」

「北村隼人といいます」

「そうか、北村君か」

その声に反応して先生がクラス名簿をめくる。

「秋山君。北村なんて人このクラスにはいませんよ」

言い終わると同時に落葉が死刑宣告を出した。

「兄さん、北村君を尋問部屋に連れて行きなさい」

「どこにあるんだよ」

率直に尋ねる。

「教室の後ろのほうに向かい合わせた机と椅子があるはずなんだけど」

「ああ、あれね」

俺は振り向いてそう答えた。部屋って言うか、ちよつとした面談スペース、と言ったほうが正しいような気がするが。

しかし俺の考えとしては、このまま北村君にお帰りいただければそれで問題ないと思う。尋問する必要などない。

「なあ落葉。尋問の必要がどこにあるんだ？」

「そうね、尋問の必要はないかもね」

「そうだろう。じゃあ北村君、帰って……」

「でもせっかくだから拷問しましょうか。兄さん。五寸釘持ってる

？」

落葉は北村君を一瞬で恐怖のどん底へと叩き落した。

「ああ、でも五寸釘を使うためには槌が必要ね。兄さん、持ってる？」

悪魔が光来した。そして俺は悪魔の手から北村君を救うべく動き出す。

「分かった、分かったから。落葉、尋問するから。拷問はやめておけ」

「えー、拷問したいなー」

今の落葉をたとえるなら玩具を買ってもらえない子供。しかし要求しているものが恐ろしい。

「あ、そうだ。家庭科室にはきつと裁縫張りがあるわよね。それを爪と肉の間に刺せば立派な拷問だわ」

何故だ、何故先生は止めに入らない。微笑んで様子を見守っているだけかよ。ああ、きつと冗談だと思って聞いているのだろうか。

俺は佐藤に視線を送る。

『おい、お前も止めに入れ』

『悪いな右京。今日は給料日だから妹さんの機嫌をそこねる訳にはならん』

『この拝金主義者がー』

だめだ、佐藤は悪魔の手先だったか。こうなれば最後の手段と言うか、最初から使えばよかった手段を使おう。俺は北村君に囁く。

「俺が注意をひく。その隙に逃げろ」

北村君は何も言わずに頷く。

俺はたっぷり息を吸った。そして叫ぶ。

「あ、今黒いノートが空から落ちてきた！」

正直、賭けのつもりだった。しかし現実は期待を大きく上回った。

「デスノートよ。きつとそうに違いないわ！」

落葉は物凄いスピードでありもしないノートを拾いにいった。

「北村君、今だ」

「ありがとう」

北村君は落葉と違って廊下を走らなかった。だが、少し早歩きだった。

佐藤は作戦の説明を始めた。

「まずはこのVTRを見て欲しい。それから右京、お前、死んだぜ」

「そう思う。俺の骨壺は安物でいいからな。それから俺の金は全て恵まれない子供たちのために……」

「にーいさーい」

闇属性悪魔族全開の落葉が帰ってきた。落葉が闇を纏っているのではない。落葉自身が闇なのだ、的な？

「兄さんが私を裏切るなんて……どうしちゃったの？」

「いや、あのね、俺は確かに見たんだよ。デスノートが。ほら、きつと誰かがノートを拾ったんだよ。こうなったら探偵役に回るしか……」

「もう喋る必要はないわよ兄さん。まずはその喉から壊してあげる」俺は落葉の手により別室に連れて行かれた。

この日の落葉の服装は1から12までの数字が複数、そして時計の針と思われる黒くて長い棒がこちらにあらわれた、エプロンドレスだった。しかし、カチューシャつけてねえからこれをメイドと判断するのは素人では厳しい。

以上です、ここから先は残酷描写、苦手な方はページをめくってください。

「どうしたの？　ちょっと握っただけで壊れちゃうのね」

訳　どうしたの？　ちょっと引っかいたただけで出血しちゃうのね。

「今日のおやつは林檎と蜂蜜。それから紅茶には苺ジャムを入れましょう」

しだった。これにより右京はその日、集中治療室（保健室）に運ばれた。

運んだのは意外なことに妹さんだった。その後、妹さんは作戦の説明が終わっても帰ってこなかった。もしかと思い保健室へ足を向けると、妹さんが養護教諭と一緒に右京を看病していた。

思うに妹さんは右京の看病がしたくて右京を半殺しにしたものだと思われる。だってねえ、兄を看病する妹なんて、これほど健気なものはないだろうに。そこにいたるまでが恐ろしいが。

ん？ どうして右京が死にかけたことを知っているかって？ それは今日の朝早く、右京が小説を書き終えて俺に届けてくれたからだ。

そして右京は一言残して家に帰った。

「とりあえず最後のほうだけでも読んでくれ。そうすれば俺がどうなったのか分かる。それからごめん、今日学校休む」

ああ、嫌な予感がするぜ。

「皆さん、おはようございます」

校長先生は決まり文句を言った。それにつられて生徒全員が校長に向かって挨拶を返す。

他にも校長は皆がんばれとか、今日は雨が降るかもしれないと予報があったからみんなの元気で吹き飛ばしてくれとか言った。

空を見上げて流れる雲を見つめた。確かに雨が降りそうだ。まあ、騎馬戦の最中に雨が降らないことをケツアルコアトルに祈るしかない。

ちなみにケツアルコアトルというのはアステカ文明の神様の一つだ。興味があつたら調べてみるといい。特にアステカ文明の占星術は本当に凄いぞ！

第一回戦は一組VS二組か。つまり俺のクラスVS二組と言うわけだ。

では、戦場へ行ってきます、と言いたいところだが俺は見学する

ことにした。いや、何故って、見学しかやることがないからだよ。だってうちのクラスは全員合わせて42人。そして今日右京が休みで41人、他欠席はなし。つまり一人だけあまると言うことになる。なんてたって騎馬は四人一組だからね。で、そのあまり役が俺に回ってきたと言うこと。

俺が立てた作戦の内容を考えると補欠役というのはまさに夢のような役回りだとは思うが……あの作戦、こちらが相手の半数でも勝つことができる戦術だから俺の出番が来ることは恐らくないだろう。だから俺は先生たちが待機している校庭の片隅にやってきたわけだ。

他にも何人か余った生徒たちが集まっていた。こいつらも余り者たちか。まあ、気分を共有しようと言うわけでもないし、そもそも勝つのは俺のクラスだ。心配する必要はどこにもない。

だから俺はポケットにしまっておいた小さな本を開いて読み始める。本のタイトルは『地球を愛するということ』。

本を開くと同時にピストルが大声をあげた。騎馬戦が始まったらしい。同時に妹さんの声が校庭一面に広がる。

「密集陣形！」

そのとたん騎馬を組んだ一組の生徒が一つの生き物であるかのように動き出す。妹さんを中心に密集した。

「突撃！」

今度は一つの塊となった一組が二組の生徒に突進してゆく。先頭を行くのは妹さんだ。

通常騎馬戦と言うのは相手の鉢巻を奪い合うゲームだ。しかしもう一つルールがある。騎馬は崩れるとその時点で失格となる、と言うルールだ。今回の作戦はそこを狙ったものである。

そう、密集して相手の騎馬に突進し、崩す、と言うものだ。しかもこちらは密集しているため防御力が高い。結果、こちらの被害は最小限に抑えられ、敵の騎馬は崩れ去る。

さらに密集陣形にはもう一つの強みがある。

通常騎馬戦チームはゲームが始まると散らばって行動する。それが大きな間違いだ。

ここでランチェスターの法則と言うのを紹介しよう。赤チーム3対青チーム5の兵士が相手を殲滅するまで戦った場合、どちらの兵士がどれだけ残るか、と言うものである。

普通に考えれば5－3＝2で青チームが2人生き残ると考えられる。しかし実際は違う。仮に全兵士の攻撃力を1、体力を5としてみよう。

先制攻撃を仕掛けるのが赤チーム、後攻が青チーム。赤チームは最初の攻撃で青チームの兵士一人の体力を3削る。その後青チームは全員で攻撃して赤チームの兵士を1人倒す。これを続けていくと、青チームは4人も生き残る結果となる。

つまり集団戦において考えなしに兵力を分散させるのは自殺行為に等しいのだ。全体に兵士量が互角だったとしても、分散したところを一つ一つ潰していけばランチェスターの法則成立だ。そして2組の生徒はこちらの思うようにばらばらになって行動している。こりゃ、圧倒的だな。

そんなこんなで二組との試合が終了した。結果は、語るまでもなく一組の圧勝。

しかしあまりにもバイオレンスな試合運びだったために次から集団突進戦術の使用が禁止された。それからちよつと保健室に顔を出してみたが野戦病院のような光景だった。

俺が立案した作戦でこうなったんだよね。でもね、俺も妹さんいは逆らえないんだよ。ごめんね二組のみんな。

続いて三組VS四組。語るのが面倒、と言うか一般的な騎馬戦を思い浮かべていただければ問題ありません。だからあえて語りません。唯一語らなければならぬのはこれくらいかな。『勝者 四組』
読書をひと段落で区切る。続きはまた今度だ。本を閉じた。同時に何かが鼻に当たる。角度からして真上から降ってきたものと思われる。だから空を見上げた。

太陽の姿はない。その代わり分厚い雲が空を覆っている。群青の空はどこにも見当たらない。

続いて額に何かが当たった。それは水だった。どうやら、神様が泣き出したようだ。

さらに右手に雨が当たる。他の生徒たちも異変に気付いたようで空を見上げ始めている。

それから大雨になるまで大して時間はかからなかった。結局騎馬戦は中止となり一組VS四組の騎馬戦は始まることなく終わりを告げた。

そして場所は変わり一組の教室の昼食風景。俺は妹さんと向かい合って弁当を食べていた。ちなみにコスチュームは動きやすいジャージ姿です。今日はTPOを重視しているようだ。

「…藤…」

正直、怖いです。目の前に魔王がいます。騎馬戦の勝敗が決まらず、鬱憤パワーのチャージを完了した妹さんが目の前にいます。今なら断言できる。このままでは生命あふれる青い地球が、灰色の荒廃した死の星へと変わってしまう。勿論、妹さんの手によって。なんか、妹さんならできる。そんな気がする。この、最終鬼畜妹なら……。

「佐…君？」

世界を救うために、どうにかして妹さんの機嫌をなおそう。しかし、どうやって……。

「佐藤君！」

「は、はい」

まずい、物思いにふけていたから妹さんの声が聞こえていなかった。あー、妹さんの表情からして加速しているよ。不機嫌さを加速させているよ。このままじゃ本当に世界が滅びかねない。世界の命運は俺にかかっているぞ。安くなったもんだな、世界。

「昨日はありがとう」

「え？」

「だから、昨日はありがとう」

「俺何かした？」

「作戦を立ててくれたじゃない。それも圧倒的な。感謝してるわ」

「別に、俺一人の力で立てた作戦じゃない。ヒントをくれたのは右京だ」

「えっ、兄さんが？」

「ああ、右京がいなかったらあの作戦は成り立たなかった。右京のおかげだよ」

「そうなんだ」

まったく、本人のいないところで右京を褒めるとすぐに機嫌をなおすんだから。ふっ、読みどおり。本当は右京のやつ、何もしてねえよ。そして感謝してくれよ地球のみんな。

しかし妹さんはまた不機嫌な表情をした。何故だ、ばれたのか？

「でもね佐藤君、いくら兄さんが有能な存在だからって敵国に助けてもらってちゃ、超合衆国落葉のナイトオブ1がつとまらないわよ」

「精進します、女王陛下」

「よろしい」

やれやれ、もう少し素直になれば右京も振り向いてくれるだろうに。てか、右京を敵国の人間とするって事は、超合衆国落葉は日本を敵とみなしているのか？ 軍隊を持たないとはいえ強国だぞ。大丈夫か。

「そうだ佐藤君」

「なんだい？」

「もしもあのまま騎馬戦が続いていたらどっちが勝っていたのかしら。ちよっと占ってみて？」

「了解」

俺はバックパックの中からタロットカードを取り出した。切り混ぜてカットして、妹さんの前におく。

「さあ、ひいてみて」

「うん」

妹さんは一番上のカードを引いた。正位置のチャリオットだった。

「意味はなに？」

妹さんが尋ねる。

「意味は勝利」

「勝っていたってこと？」

「そういうことになるかな」

「なんだ、やっぱり私の勝利じゃない。やっぱり世界は私を中心に回っているんだわ」

ははははは、笑うしかねえ。

「それにしても妹さん」

「なに？」

「俺なんかの占いを信じていいの？」

「いいのよ。佐藤君は我が国が誇るマジック・ナイトだもの」

妹さんは桜満開の笑顔でそう言った。俺はただ、

「それは光栄です、女王陛下」

と付け加えた。オカルトマニアからマジック・ナイトに格上げか。それも悪くないな。

「みんなー、嬉しいお知らせですよ」

昼食の時間が終わると同時に清水先生が教室に入ってきてそう言った。

「これから四組のみんなと決着を付けに行きます。だから体育館に移動しますよー。いいですねー」

クラスには右京を除く生徒全員が集まっていたので生徒たちは先生の言うとおりにすばやく体育館へ移動することができた。

で、俺は体育館に入った瞬間、絶望した。理由は、銃とゴーグルを手渡されたからだ。材質と重量からしてモデルガンであることは間違いないのだが……かなり絶望的だ。なぜなら俺は銃の扱いが苦手なのだ。この前右京と一緒にゲームセンターに入ってガン・シユ

ーティングゲームをやったが……28秒でライフはゼロとなった。だって飛んでくる弾丸をどう避けても当たっちゃうんだよ。いくらバックステップとっても攻撃を回避できないんだもん。

まあ、それ以前の問題として、俺はボールを投げて的に当てることすら出来なのだ。つまり、遠距離戦闘において、俺は無能な存在なのだ。それなのにモデルガンを手渡されるって。

ちくしょう。俺はどっちかと言うと近距離戦闘向きなのに。いや、本当だよ。中学生のことは剣道部に半年だけいたことがあるし右京とチャンバラやって負けたことが一度もないくらいだ。

これからモデルガンでの当てゲームでもしようというのなら俺は一瞬で戦力外とみなされ妹さんに体育館から追放される。

しかし、どうやらの当てではなさそうだ。それは体育館の中を見れば一目瞭然だった。障害物はあるはバリケードはあるはトーチカはあるはで、体育館の中は要塞と言ったほうがしっくりくる感じだった。

まさかとは思うが先生様、これからここで四組と決着をつけろと言うのですか？

「みなさーん、注目してくださいーい」

清水先生の声が拡声器によって体育館に響く。

「先生たちの話し合いの結果、これから一組と四組の皆さんにはここでサバイバルゲームをしてもらいます」

自我崩壊を感じた。

大雑把なルールは先生が説明してくれた。どんな手を使ってもいから相手の陣地にある旗を奪いに行け。ただし、怪我だけはするな。以上。

ゲーム開始時刻まであと3分。俺は妹さんに作戦を立てろと命令されてそれを今まさに実行しているのだが……何も出てこない。まずいよ、俺は近距離戦の戦術ならいくらでも作り出せる。しかし入り組んだ地形でかつ銃による戦闘となると、俺は場違いかつ無能な存在だ。だが俺以外に作戦を立てられそうな人はいない。先ほど妹

さんが作戦の募集を行ったが誰一人手を上げた者はいなかった。

そしてその妹さんが戻ってきた。

「着替え終わったわよ。いい作戦は思いついた？」

迷彩服だった。しかも市街地戦用の灰色。確かに体育館内の設備は全てコンクリート色だから目立つことはないだろう。つまりそれだけ狙われにくい、と言うことだ。多少ではあるが妹さんの安全率が上昇したことに安堵する俺。

「佐藤君、作戦の説明をお願い」

「分かった」

こりゃ、完全にクラスの作戦係として任命されそうだと思いながら、苦手分野だが必死になって知恵を絞りながら考えた作戦を皆に説明する。

「地形図を見て検討した結果体育館のサイドの中央二箇所を設置されたタワーを押さえるのが攻撃と防御の要だ。必ず押さえて欲しい。よってここを押さえるために人数の半分以上、30人を割り当てる。出席番号11から25までの人はこちら側から見て右の、そして26から42までの人は左のタワーをゲーム開始直後から制圧して欲しい。残りの10人はタワー制圧後、フラッグを狙いに向かってくれ。以上だ」

説明終了と同時にゲーム開始のブザー音が体育館を支配した。

「急いで、相手より先にタワーを押さえるのよ！」

妹さんがそう宣言したとたん全員が動いた。二手に分かれバリケードや障害物を一列になって駆け抜けていく姿はまるで二匹の蛇。そして蛇は十秒と経たないうちにタワーを制圧した。

「次！フラッグを取りにいくわよ！」

妹さんの叫びと同時に残りの10人が動き出す。よし、タワーの制圧はこのゲームにおいて大きいぞ。後はタワー二箇所からの援護で全てを有利に運べる……はずだった。

俺は出席番号の都合上タワーの上からライフルで狙撃を行い攻撃班の援護をする予定だった。しかしそれらの作戦はある兵器の登場

により全て粉々に砕かれた。

それが飛んできた瞬間、俺は反射的にタワーの上から飛び降りる。高さは2メートル強。足を挫かずに着地することに成功する。同時に、巨大な爆発音。真上で赤い火の手が上がる。

多少のタイムラグを生じて反対側のタワーにもそれが命中する。俺はそれを見た。間違いない。対戦車擲弾、つまり……ロケットランチャー。一瞬でタワーの上にいた30名の兵士を失った。畜生！タワーがこのゲームの要であることは敵陣から見ても百も承知。そこに大量の兵士を割り振ることは読めていたんだ。そして一網打尽……。

しかしこれは悲劇の幕開けだった。ベルトリンク式の軽機関銃を構えた敵が無人となったタワーを占拠。そして引き金を引く。中央にいた攻撃部隊を冷酷な弾丸が襲う。

俺は荷物になるライフルを捨てて走り出した。次々と血飛沫を上げながら倒れていく生徒たちの中から一人の少女の手を引いて走った。安全地帯、最初にいた自分たちの陣地へ。

「佐藤君……大丈夫？」

「まあ、何とかね。妹さんこそ、被弾してない？」

「私は大丈夫よ。それより佐藤君、左腕から血が」

「かすり傷だよ」

「でも、血がこんなに」

「そんなことより、相手の装備について何か意見は？」

俺は話題を変えることで腕の傷を誤魔化した。

「そうね……こちら側の十年は先を行く装備だと思うわ」

「そうだね。このままだとモビルスーツとかアームスレイブとかが出てきそうだ」

「降伏しましょう。もう勝てっこないわよ」

俺はその時、あるものを見つけた。

「そうだね、生き残っているのは俺と妹さんの二人だけだろうし。でも、少し待って欲しい」

俺はそのあるものに全てを賭ける気でいた。

二本の木刀がそこにおいてあった。恐らく剣道部の忘れ物だろう。一方は普通の長さの、いわゆる太刀と呼ばれるタイプのもの。そしてもう一方は小太刀と呼ばれる短い刀。

「佐藤君、まさか！」

「その通り。俺はこの短いほうを選ばせていただよ」

「ちょっと待って。相手の数が多いから攻撃範囲が広いほうが良くない？」

「いや、こう入り組んだ場所、つまり室内戦だと長い得物は引つかかって使いづらい。だからここはあえて小太刀で行かせてもらうよ」俺は思考をめぐらせる。やるとしたら一点突破しかない。相手を全滅させようなんて考えては駄目だ。フラッグを狙うしかない。しかし、相手も馬鹿ではない。こちらの数はもう分かっているだろう。恐らく、自分たちのフラッグの警備を固めてこちらが降伏するのを待っているはずだ。一点突破も非常に困難か。

もしくはこちらがまだ温存している可能性も考慮してこちらの残兵を探し倒してから確実にフラッグを取るために兵士を前に出しているか。

後者だった場合フラッグを取るチャンスはまだある……が。

あらゆる細胞を思考に回した。しかし、届かない。後一步のところでフラッグに手が届かない。俺は救いを求めるように体育館の窓から外を見る。

俺はそれを見た瞬間、神に感謝した。あった、たった一つだけフラッグに手が届く方法があった。

「妹さん、行ってくるよ」

「できるの？」

「質問に質問で答えるのはガラじゃないが、俺を誰だと思ってる？」

「落葉女王陛下直属近衛兵隊隊長佐藤陽太郎。コール・サインはナイトオブ1」

「その通りです、女王陛下」

「分かったわ。行きなさい！」

妹さんは勢い良く言った。

それを合図に俺は駆け出す。バリケードを飛び越え障害物をすり抜けタワールの下を通り抜けた。

最初の敵兵の集団を発見する。相手もこちらに気付き一斉に銃を構え、そして発砲。と同時に俺は身を低くしスライディングで流れ弾のない足元の空間に滑り込む。さらに敵一人の足元に入るとすぐに身を起こして小太刀を心臓に突き刺す。その男は即死した。次々と敵兵が反応して俺に銃を向けるが即死した男を盾にしたため弾丸は俺に届かない。

そのまま駆け抜けてフラッグに近づく。次の警備兵が姿を現す。俺は小太刀を喉めがけて投げた。小太刀は小さな竜のごとく飛翔し敵の喉を切り裂く。命中した刃を男が倒れる前に回収する。そしてその男が持っていた短機関銃を体育館の入り口に蹴り飛ばし、また駆け抜ける。

何度敵を斬りつけただろうか。そんなの、最初から数えていない。だが、確実に十人は倒しただろうと思った。だが、俺の活躍もここまでのようだ。完全に囲まれている。悔しくはない、むしろ計画通りだ。

俺の猛攻を見た敵の指揮官はほとんどの兵士を俺に差し向けたようだ。だから、もう逃げ場はどこにもない。俺は今フラッグから少し離れた位置にいる。後はアイツが体育館に現れれば勝利は確実。誰かが引き金を引いた。その後少し遅れて俺は床に倒れた。だが、これは予想済み。自分の死さえ予想の範疇。反撃の準備は万端だ。それからまた少し遅れて誰かが体育館の中に入ってきた。

その男は先ほど蹴り飛ばした銃を拾うと誇らしく叫んだ。

「佐藤、大丈夫か！」

全然大丈夫じゃない。てかもうリタイアだ。でも、後は任せたぞ。

……そういえばチャリオットのカードには援軍と言う意味もあったな。俺の意識は闇に落ちた。

体育館の窓から見えたのは右京の姿だった。右京はこちらに気付
き俺がピンチであることをすぐに察知した。俺が敵をひきつけてい
る間に右京が体育館に入りフラッグを手にする。そういう作戦だっ
た。

意識を失った後のことは全て妹さんから聞いた。右京は大活躍だ
ったそうだ。まあ、ともかくこれで小麦粉がロッカーの中に入って
いるなんて事は起こらないだろう。

「てか右京、今日お前休みのはずじゃあ？」

「ファルシータさんの真面目さに心を打たれて登校することにした」

「なにそれ？」

「気にするな」

それからもう一つ。俺はサバイバルゲーム終了と同時に右京に言
った。

「小説の内容、全部は見てないから何ともいえないが、最後の残酷
描写はまずいんじゃない」

5日目 金曜日。

学校からの帰り道、俺（秋山右京）は佐藤と二人で帰宅していた。
落葉は用事があるので学校に残った。どんな用事があるかまでは話
さなかった。しかし深入りすれば苦痛を伴うやり方で殺されるのは
当たり前なので、普通に「はいそうですか」と言って佐藤と帰って
きた。で、俺は学校の帰り道で佐藤に問うた。

「小説読んだよ。感想を言おうと思うんだけどいいよね。てか言う
よ……はじめにサバイバルゲームって戦争ゲームだよな？」

佐藤は答える。

「そうだな、結局は遊びだ」

「遊びだよ、やっぱり遊びだよ。じゃあなんで血飛沫を上げながら生徒たちが倒れていくんだよ。訳わかんねえよ」

「そうしないと感動が薄れるだろう。やっぱり戦争ごっことはいえ本気でやらないと」

「本気なのはお前の表現力だ。何故にサバイバルゲームでロケットランチャーが出てくるんだよ。どうして爆発するんだ。なぜ火の手が上がるんだ」

「表現の工夫ってやつだよ。現実起きたことをそのまま書いたって面白くも何とも無いだろう」

「でもちよっとやりすぎだろ」

「俺も右京に原稿を渡した瞬間にそう思った」

佐藤は、今日家に帰ったらちよっと修正してみるよ、と付け加えた。それからもう一つ。話は変わるが言いたい事がある。空氣的に言っても大丈夫そうなので俺は言った。

「てか後で調べてみたけどさ」

「何を？」

「使った遊戯銃だよ。何で一組の生徒が使っていたライフルがボルトアクション式なのに対して、何で四組の生徒がセミオート式の狙撃銃を使ってるんだよ。それに軽機関銃だってこっちはM60だったのに相手はFNミニミなんだよ。時代が違うだろ。相手の武器のほうが一番最新式だよ」

「セミオートとかミニミとか言われても近距離戦闘専門の俺から言わせてもらえば何を言っているのかさっぱりだ。昨日の小説だって右京のアドバースが無かったら銃に関してのところは白紙になっていたところだぞ。ちよっと解説を入れてくれるか？」

そう言われてみればそうだ。解説を挟もう。

「ボルトアクション式と言うのは一昔前のライフルに多く見られたタイプだ」

「うーん、三八式歩兵銃とか？」

「そうそう。ああいうタイプの銃だ。ボルトを手動で操作して弾丸を装填、排莢する機構の銃だ。連射速度は遅いものの今の技術なら非常に命中精度の高い銃が作れるから狙撃銃や狩猟用などでは現役で使用されている。代表作はレミントンM700かな？」

「なるほど、対してセミオートとは？」

「これらの作業を全て自動で行う。構造が複雑になるため命中精度は落ちるが連射ができる。でも最近は技術の向上から命中精度もどんどん上がってきている。でも重くなるからセミオートが完全にボルトアクションを駆逐する日はまだ遠いだろう」

「M60とFNミニミについては？」

「1957年にアメリカが制式採用した軽機関銃がM60だ。でもってミニミはM60の後継者として選ばれた銃だ。M60は分間50発の弾丸を放つのに対しミニミは750〜1000発の弾丸を一分間に発砲できる」

「俺はそんな弾丸の嵐の中を駆け抜けていたのか」

「で、話は戻るがどうして俺たちが使っていた銃が時代遅れのものだったんだ？」

「それに関しては清水先生が謝っていたよ。ごめんなさい、私のお金がないばかりに古い装備で戦ってもらうことになっちゃて、と」

「なに、あのエアガンはすべて先生の懐から出たの？」

「そうらしい」

そして俺が、清水先生はモデルガンを集めるのが趣味だと知ったのは今だった。しかもそれらの銃はすべて先生のロッカーに入っていたものらしい。

「ん？ ちょっと待てよ」

俺は言葉の中で立ち止まった。

「じゃあ四組が使っていた最新装備を準備したのは誰なんだ？」

「それはすでに調べがついている」

「いや、そこまでしなくていい」

「妹さんの命令なんだよ。俺スパイだからさ」

「そうか、そりゃご苦労さん」

「一応お前にも説明しておこう。四組の先生が以上に金持ちでねえ、清水先生がネットオークションでモデルガンを手に入れているに對し、四組先生は特注で作らせているというわけさ」

「怖いな、四組、じゃ、もう家に着いたから」

「おお、もうそんな所か。て、俺の家の前だよね、ここ」

確かにもうここはマンションの5階だ。でもって佐藤が住む504号室前。

「それじゃあな右京。また明日。ちゃんと小説書けよ」

「ああ、分かってる」

俺は佐藤と別れる。

家に帰るとかない様が俺を迎えてくれる。

「お帰り右京君」

「ただいま」

かない様の声は今の状態では俺にしか聞こえない。だから返事をすると怪しまれる。しかし今この家には俺とかない様しかない。だから返事をして問題なかった。

「そういえば落葉ちゃんは？」

かない様は俺が返事をしたことで状況を把握したようだ。だからこんなことが聞けるわけだ。

「用事があるので学校に残りました。でもそのうち帰ってくるでしょう」

俺は玄関の鍵をかけて靴を脱いだ。かない様と一緒に部屋に入って靴を下ろす。うちは私服校なので着替える必要はない。そのままだ。

パソコンを起動させてワードを開く。ディスクトップには俺が今まで書いた小説が保存されている。もう一度見返してみるのも悪くはないが、落葉が帰ってくるまでに、できれば小説は完成させたい。なぜって、この内容を落葉に見られたら俺、今度こそ殺される。

さて、今回はどうしたものか……。正直、あれしかないよな。俺

はキーボードに手を添える。

「あー、面倒。誰よ、進路相談なんて考えたの。そう思わない兄さん?」

「思わないよ。そもそも学生をやるうえで避けては通れない道だろうが。それにもう何度か進路相談なんてやっているだろ。いいかげん慣れろよ」

「うるさい。兄さんには私の気持ちがいっぱいも分かってないんだわ」

ああ、分からねえよ。全く分からん。全然分からん。落葉は他にも愚痴をこぼしていたが俺は適当かつ安価にスルーする。

現在、俺と落葉は進路相談の順番待ちをしている。順番は名前順なので現在相川君が進路相談を受けている。俺の名前は確かに『あ』から始まるが次に『き』じゃ相川君には勝てないよな。話によると相川君は今まで出席番号が1以外になったことがないらしい。

ちなみに佐藤は教室で俺たちの帰りを待っている。まあ、そりゃあ名前順で佐藤だとまだ先だよな。

「ねえ、兄さん」

「なんだ落葉。暇つぶしなら付き合うぞ」

「どうして分かったの?」

「なんとなくだよ」

「なんとなくか……うん、やっぱり兄さんね」

落葉は微笑んだ。まるで向日葵の花が咲くような笑顔だったが、こいつの性格の本編ショーを見せられたことのある俺から言わせてもらえば恐怖の対象でしかない。

「それじゃあ質問1」

1つて事は10あるって事だよな。心してかからないと。

「兄さんは夜眠れず自宅のバルコニーに出ました。そこで目撃したのはある男が女性を刀で殺していたところです。警察に通報しようと携帯電話を耳に当てたところある男と目が合いました。すると男

はこちらを指差し一定の間隔で動かしています。何故男はそうしたのでしょう」

……そもそも携帯電話を持っていない、と答えたかったがそんなの受け付けてくれないだろう。

「うーん、そうだな。口封じするために俺がいる階を数えているんじゃないのか？」

言った瞬間、落葉は口を押さえた。驚きの表情を隠しきれていない。

「じゃ……じゃあ次の質問ね」

「はいよ」

「サンタクロースが男の子にサッカーボールと自転車を与えました。でも男の子は喜びませんでした。どうして？」

「足がなかったのさ。身体障害者なめんなよ」

「いやあああー」

落葉は叫んだ。

「それじゃあ……それじゃあ……それじゃあ最後の質問ね」

もう最後か。予想外の展開で救われた。

「あなたは泥棒です。ある家に夜中忍び込んだところその家の主人が起きてあなたの顔を見ました。でもって鍵のかからないタンスの中に隠れました。さあ、あなたの手にはナイフがあります。どうやって殺しますか？」

「うーん。とりあえず主人が出てくるまで楽な姿勢で、そうだな……座って待ってるか」

落葉は言葉を失った。

「あれ、秋山さん、どうしてそんなに驚いてるの」
面談が終わった相川君は落葉を見てそう言った。

「気にしないでくれたまえ」

そう言って俺は相談室の中に入っていった。ちなみにさっきの落葉の質問はサイコパス診断テストといって精神異常を診断するためにする質問だ。どこで知ったかは分からないが、問題を出すよりも先

に俺が答えを知っていたので精神異常と診断されるように答えてやった。

「失礼します」

「いらっしゃい秋山君」

軽く挨拶を交わすと早速俺は机をはさんで先生と向かい合うように座る。

「それじゃあ、早速相談を始めましょうか」

「はい、お願いします」

「右京君は進学希望ですよね」

「そうですね」

「どうして進学しようと思ったの？」

「将来の夢も希望もまだ見つけられていないのでとりあえず進学先で考えようかと」

ここで先生は机を両手で思いっきり叩いた。俺は何気に度胸があるので別にビビらない。

「あまい、あまっちょろいわー。今の時代は就職不況なんだよ。秋山君みたいななんとなく生きてなんとなく進学してなんとなく勉強しているんじゃないの！ 時が流れるスピードなめんなよ。気がついたらもう三十だよ。いつまでたっても私の王子様が見つからずにもう三十よ。分かる、この気持ち。分かるわけがないわよね。この三十過ぎても独身のこの私の気持ち」

「清水先生、後半はただの愚痴ですよ」

「え、ああ、ごめんなさい。つい口が滑っちゃって」

「いえ、別に構いませんよ。俺も愚痴りたいときぐらいありますからね」

「そ、そう。じゃあ気を取り直して……」

先生は書類をめくった。

「秋山君はまだ自己紹介を提出していないんですよ」

「はい」

俺は申し訳なさそうに答える。

「どこが書き終わってないのかな？」

「将来の夢、の欄が」

「そうなんだ。でも中学時代の成績を見ると秋山君って凄いよね。だから選べる職業もより取り見取りだと思うんだ。だから焦る必要はないと思うよ。でも大学に行くとなるとやっぱり将来の進路をしっかりと決めておかないと大変なことになっちゃうよ」

「ええ、そうでしょうね。分かります」

分かっているとも。焦る必要なくても今度の月曜日までに提出だぞ。間に合うわけがないだろうが。いや、その前に何故締め切りが今日の朝までじゃないんだ？ 普通に考えて今内容に触れているじゃないか。とりあえず謝っておこう。

「すみません、僕が書き終えていればもう少し話がスムーズにいったのに」

「ああ、いいんですよ謝らなくても。先生だって昔は将来の夢を決められないで気がついたら教師なんて仕事についていただけですから」

「そうですか。ははは」

笑ってみた。

「そうよね。笑っちゃうわよね。作家を目指して一人上京して……ここは神奈川県だ。東京じゃない。」

「大学で教員免許を取っていたから何とかなったけれど、でもやっぱり諦めきれないのよ。学校でテストを作っているはずなのに気がついたら小説を作っているの」

こいつ……ダメ人間だ。

俺は話を軌道に戻すため先生の話を遮ろうとする。

「先生？ 話がずれているような……」

「作家を目指していたんならせめて国語の教師になれって感じよね」

「燃え上がれー、燃え上がれー、燃え上がれー、ガン……」

「私にもあの生徒たちのように輝いていた時代があったはずなのに……どうしてなのかしら」

「すみません、実は私男装した女性……」

「いい秋山君、作家という人生だけは歩んじゃダメよ。分かった？」

「はい、分かりました」

結局納得してしまった。理由、楽だから。畜生、著作権に触れる寸前までがンバったのに。次の面談のときは夢の国のテーマを熱唱しよう。

「それからもう一つ、耳寄りの情報を秋山君に教えてあげる」

「何でしょうか」

「右京君の妹さん、秋山落葉さんのことなんだけど」

「それがなにか」

来る、何かが来る。俺の思考回路が高速回転を始める。いや、光速回転というべきだろう。しかし何が来るのか答えは導き出せない。あの妹の行動は厄介ごとを起こすということ以外予想できないから困る。回転しすぎて思考回路が遠心力で吹き飛ばないうちに俺は考えるのをやめた。

「秋山落葉さんがこんな事を書いていたのよ」

そう言って清水先生は落葉の字が書かれている用紙を一枚俺に見せる。内容を見ようとした前から、俺は体温がわずか0.5秒で絶対零度に達するのを感じた。いや、ひよっとしたら世界が氷河期に逆戻りしたのかもしれない。

まてまて、そんなはずがない。あつてたまるか。そうだ、ひよっとしたらクーラーが部屋全体の温度を下げたのかもしれない。俺は辺りを見回す。なんだよ、クーラーが無いじゃないか。窓も……開いてない。

さて、思考が現実的な動きを始めたぞ。そろそろ冷静になって落葉が書いた文字を読もうじゃないか。

まず名前、秋山落葉……落葉の字だ。これは間違いなく落葉が書いたものであることを証明している。

次に趣味、読書……これは俺も知っている。落葉は結構本が好きだ。ライトノベルなどを中心に読んでいる。

次……………

俺は邪気を放っている用紙に一通り目を通した。そしてぼそりといった。

「こ、殺される。このままだと俺と佐藤は社会的な意味で確実に殺される」

そうだ、最後の欄だ。最後の、将来の夢の欄にこう書いてあったのだ。

『秋山右京と佐藤陽太郎のお嫁さん』

俺は最後の気力を振り絞り一言だけ言った。恐らくこれが俺の最後の一言になるだろう。

「先生、ちょっと屋上の鍵を借りていいですか？」

「ごめんね、10年前に飛び降り自殺があって以来屋上は開放されていないの」

「そうですか。残念です」

畜生、学校は俺に死ぬことすら許さないのか！

「ごめんね秋山君。屋上で妹さんと愛を語り合う時間をあげられなくて」

あんたは教師だろうが、不純な異性交遊は禁止って生徒手帳にも書いてあったぞ！

「でも学校は公共の場だから刺激的な恋愛は家でやってもらいたいわね、三人で」

何が刺激的だ。犯罪的の間違いだろうが。しかも三人って佐藤も入ってるのか。入っているのか。

「それにしても高校に入っていきなり三角関係なんて、うらやましいわね。先生が学生の頃は恋愛よりも勉強だったからなー。そういうえば佐藤君、将来の夢を小説家にしていたわ。きつと落葉さんの気を引くためね。このままだと秋山君、負けちゃうわよ」

そうだ、何か、話題をそらすんだ。何でもいい、先生の趣味とかそこらへんに話を持っていけばこれ以上この永遠と続くかもしれない落葉の恋愛話を避けられる。このタイプの女は自分の趣味に話が

持っていかれると浮かれて調子に乗るタイプだ。確かに先生の趣味に付き合うのは気が引けるが、落葉の恋愛話よりは気が休まる。

「そういえば清水先生はモデルガン集めが趣味なんですよね」

「なに話をそらそうとしているの？」

ダメですか、ダメなのかよ。

「はあ、ちょっと休憩するか。てか、この後に続く先生の長い説教を思い出すだけで、人生で使う気力の80パーセントを消費しまう。てか、小説を書いているはずなのにもう一度面談をしているかのような気分になっちゃうのは俺だけか？ やっぱり佐藤も書いているうちにその日をもう一度体験しているかのような錯覚に襲われているはずだ。そうは思いませんかねい様」

……返事はない。俺は部屋を見回す。

「あれ？ かない様？」

いつもならば後ろで詰め将棋でもしているはずなのに、今日に限って部屋にいない。いや、将棋セットが落葉に破壊されたからそれは無理か。じゃあ何をしているのだろう。

まあいい。休憩は続行だ。サイダーでも飲みに行くか。冷蔵庫のあるキッチンへと俺は向かった。で、向かう途中の廊下でかない様を発見した。お盆でなにやらカップを二つ運んでいる。

「あ、右京君。ミルクティーいれてみたんだけど、飲むかな？」

「ありがとうございます。頂きます」

感激だ。落葉じゃ絶対ありえねえ。それに比べてさすがはかない様、気が利く。

俺は部屋に戻りかない様と一緒にミルクティーを飲むのであった。しかし、トラップカードだった。

「かない様。これ、ミルクティーじゃなくてホットミルクです」

「あれ、ああ、私またとんでもない勘違いを」

「大丈夫ですよ。ミルクティーもホットミルクも主成分は水ですから」

他人の失敗を許す……間違えた。このお方は神様だったよ。じゃあ他人じゃなくて他神？ まあいい。どちらにせよ他人の失敗を許す、これは落葉には無い能力だ。それに比べて、ああ、なんて心が広いのだろう、俺。なんて優しいのだろう、俺。

その後、俺はかない様との会話を楽しみながらホットミルクを飲み、また小説の執筆を続けるのだった。

6日目 土曜日。

「続けるのだった」

原稿の最後の部分を朗読して原稿を読み終えたことを知らせた俺（佐藤陽太郎）はテーブルの向こう側に座る右京を凝視する。

「なに？ この最後のとってつけたような会話」

「いや、必要だと思ったので」

「はつきり言っていない。小説としては失敗。一息入れるシーンは要らない」

右京は首の力を抜き、がくつと下を見た。『小説としては失敗』の部分に反応したものだと思われる。まあ、現実の厳しさを知って成長したんじゃないかな。

さて、次は他の内容を触れていこう。俺は右京をひたすら凝視した。

「そして何故そんなに俺を見る」

「そしての方が意味不明だ。まあ、それはともかく言いたいことがあるからだ」

「何だ。まあ、大体分かるが」

「このロリコンかつ銃器オタク」

「言いたいことは分かった。だが俺のアドバイスがなければお前は一昨日の小説を完成させられなかった」

「それは認めよう。だがボルトアクションだのミニミだとかは聞いてない。なにフィクション書いてんだよ」

「お前だってフィクションを書いているだろう。その日あったこととはいえ全てを思い出すのは完全に不可能だ。だから記憶から抜け落ちた瞬間は自分の想像で埋めるわけだ」

「まあ、授業内容をノートで見返すことはできても先生が言った言葉を一言一句正確に覚えている生徒はまずいないだろうし」

「その前に二人でリレーエッセイを書こうと思った瞬間に、こういうことが起こると予想できなかった俺たちは、まだまだ半人前だな。お互いもう少し成長が必要だな」

「そうだな」

納得した俺。しかし気になることが一つ。

「ちなみに面談のシーンはどの程度フィクションだ？」

「いや、忠実に再現したぞ。記憶に残りまくりだったからな」

「となると妹さんの将来の夢は……」

「あれは強烈な記憶だったな」

「え、じゃあなに？ 結婚式はどうなるわけ？」

この俺の一言により時が凝固した。沈黙と言う名の空気が二人の間を支配する。

「ごめん、言っちゃ悪かったな」

謝る俺。しかし時はすでに遅い。右京は今の一言で様々な思考をめぐらせてしまったようだ。

「なあ佐藤。結婚式の定番ってあれだよな」

「キスだよな……はっ！」

分かったよ、右京の言いたいことが分かったよ。

「右京、もし三人で結婚式やったら、俺とお前……」

「そういうことになる可能性は十分あるだろうな」

嘘だろ……俺は高校生活がちょっとしたラブコメ的な感じで進行してくとばかり思っていたのに。

「ま、まあ落葉も確実に遅いけれど、そのうち常識を身につけて日

本の法律になじんでいくだろう」

「右京、妹さんにはあれがある。日本の法律には縛られない」

「くそう、超合衆国落葉か」

「もしかして右京、妹さんが建国した理由って……」

「ああ、どう考えても一夫多妻制の逆をやるつもりだろうな」

「右京、ちょっとヒモなしバンジーをやっ来て来い」

「今ならできる気がするよ」

そう言って右京はテーブルを立ちベランダのほうへ向かった。俺は止めなかった。

三分くらいして右京は帰ってきた。てか、俺たちがいるのがリビングでそのすぐ隣が窓でその先がベランダだから様子は丸見えだった。

「特にひねる必要もなさそうなので、普通にただいま」

「遺書を書くことを忘れてるぞ」

「ああ、そう」

ピンポーン……

インターホンが鳴った。しかし右京は、

「ん？ 誰が正解したんだ？」

さすがにそのボケは厳しい、音的な意味で。ピンポーンならまだ分かるがピンポーン、だぞ。棒が一本多いんだぞ。

と思いつつもここは俺の家だし両親は不在だし、俺が出るしかない。

「はいはい、どちら様ですか」

言いながら俺は扉を開ける。すると……

「おはようございます。佐藤さん」

との返事。俺は誰なのか確認する。桜木楓^{さくらぎ ふう}さん、503号室の住人だ。

桜木さんは肩くらいの髪を風になびかせながらドアの前に立っていた。

俺は挨拶をされたのでこちらも挨拶（基本中の基本だな）をする

ことにした。

「おはようございます桜木さん。どうしたんですか？」

「お嬢様から招待状を預かっています。どうぞ」

桜木さんは小さな封筒を俺に手渡す。すぐさま俺は招待状を受け取るが少々分厚いことに違和感を覚える。人差し指と親指をずらして分厚さの正体を確認すると、

「あれ、二枚ありますけど」

「秋山さんの分です。505号室を訪ねたら佐藤さんの部屋にいるとのことでしたので」

「分かりました。渡しておきます」

「お願いしますね」

桜木さんは笑った。それはとても上品な笑いかただった。まるでクラシックを聞いている気分になるような。と言っても、この人はいつものにこにこしているから魅力を感じたりはしない。逆にどれだけ疲れていようが笑っている強い人だ。

「では、失礼します」

一礼して桜木さんは隣の部屋に帰っていった。

俺は扉を閉めるとすぐさまテーブルのあるリビングに戻る。

「右京、これお前宛」

封筒を手渡す。

「ああ、サンキュー」

右京と俺は封筒を開封。中には手紙が入っていた。

『右京へ。今日の3時にお茶会を開きます。というわけで絶対来てね。ゆゆこ』

こちらの都合は無視か。いや、暇であることを見抜かれているだけかもしれない。まあそれはともかく、

「右京、俺が読んでいるほうはお前宛だ」

「そして佐藤、俺が読んでいるのはお前宛だ」
すぐに招待状を交換。

『陽太郎へ。今日の3時にお茶会を開きます。というわけで絶対来

てね。ゆゆこ』

「交換しなくてもよかったな」

そして時刻は午後二時五十五分。俺は自分の部屋の時計を見て時刻を確認した。一応お茶会と言う多分真面目なところに行くので派手な服装はやめて控えめな緑の服に着替えておいた。

俺は妹さんと違って服装にお金をかけたりはしない。ただし右京のように最低限だけ買うようなこともしない。

俺の服装は錬金術で言う四大元素に基づいている。炎の赤、水の青、土の茶、空気の緑、といった感じだ（他にもいろいろとあるが、これ以上詳しくは書けない。右京に怒られる）。

今回は春なので春っぽい緑を選ばせていただいた。

さて、後は503号室に行くだけだ。俺は自分の部屋を出て玄関へ行き靴を履いて玄関扉を開ける。家の中には相変わらず誰もいないので鍵を閉めるのを忘れない。

そして歩くこと5秒。俺は503号室にたどり着く。インターホンを押して返事が来るのを待つ。しばらくして桜木さんの声で、少々お待ちくださいという声が返ってくる。

扉が開くまで約9秒。桜木さんが扉を開ける。

「こんにちは」

俺は挨拶をする。

「お待ちしておりました。どうぞ、お嬢様がお待ちかねです」

俺は共同廊下から部屋に入り、ベランダに案内された。いや、ベランダというのは少々語弊がある。正直、バルコニーと言ったほうが正しい感じだ。

広い。かなり広い。この部屋の持ち主である富士見ゆゆこさんがリフォームを業者に命じて改造した結果、ものすごい広さとなっていることは俺と右京の間では有名。雰囲気も紅茶を飲むのに最適な

環境となっている。

バルコニーだけでなく部屋の広さも問題ない。どこにも設計ミスは見当たらない。柱と壁を極限まで削って部屋を広くしているのだ。狭いのはトイレくらい。と言っても俺の家のトイレより8倍は豪華だが。

他にもこの部屋に入るといろいろと自分の貧乏さに驚かされる。

絢爛豪華百花繚乱な調度品が並びビングを抜けて、バルコニーに出た。

「いらっしやい陽太郎」

ゆゆこさんがバルコニーに並べられた椅子に座っていた。

「やっと来たか佐藤」

右京も一緒だった。

「先に来ていたのか」

「まあな」

俺は並べられている椅子に座った。同時に桜木さんがお茶を持ってきてカップに注いでくれる。色からしてミルクティーだ。

カップに口をつける……糖分が足りない。甘さが足りない。

「桜木さん。これ、砂糖は入っていますか？」

「はい、佐藤さんは甘いものがお好きというのは存じておりますので角砂糖を二つ」

「お気づかいありがとうございます」

俺は中央に置かれている小さな砂糖壺から角砂糖を5つ取って紅茶に入れた。これで砂糖は合計七個。ラッキーセブン。キリスト教において7はいい数字とされているからね。やっぱ七個入れないかね。俺は紅茶を飲みほした。紅茶に溶けることができなかった砂糖の塊がカップの底に残る。右京が角砂糖を七個も入れると死ぬぞ、砂糖にだって致死量はあるんだぞ、と言ったが気にしない。

桜木さんは俺が飲み終わるとすぐに紅茶のおかわりを持ってきた。「ありがとうございます」

俺は砂糖壺の中からまた砂糖を取り出そうと腕を伸ばした。

「佐藤、もうやめとけ。一応他人の家だぞ」

「自分の家の砂糖を持ってくれば問題ないのか？」

「それも間違いだ」

「あそう」

俺は砂糖を取るのをやめてストレート（牛乳が入っているからストレートではないような気もするけれど、うーん、俺は紅茶に詳しくないからパス）のミルクティーを飲むことにした。案の定コップの底に残った砂糖がいい感じに溶けて甘かった。

その紅茶を飲みほした時に少し風が吹いた。ゆゆこさんのふんわりとした薄紫のショートが風に揺れる。

ゆゆこさんの紹介をしておこう。

さて、富士見ゆゆこ（ふじみゆゆこ）さんは現在大学生。俺と右京が高校に合格した日にこのマンションに引っ越してきた。メイドの桜木楓さんと一緒に。

父親に大学生になったから一人暮らしを始めろと言われてそこからすべてが始まったらしい。一人暮らしなのにメイドと一緒に、いったいどうなっている事やらと思っているが、不思議に思ったら多分負けだろう。それに今までゆゆこさんと桜木さんと同じ建物で過ごしてきた問題はほとんどなかったから別にいいのだが。

で、俺と右京はゆゆこさんに友達とみなされてこうしてたまにお茶会に呼ばれるのである。

それからもうひとつ、ゆゆこさんの月々に使っているお金だが……本人は一千万円だと言っている。その証拠にこの人は一食一万円のランチを普通に食べるのだ。しかも俺と右京も誘われたことがある。いや、うまかったよ？ 気分は悪かったけれど。

「そうだ陽太郎」

右京と話をしていたゆゆこさんが俺に話をふってくる。

「なんですか？」

「自慢したいことがあるの。私の部屋まで来てくれる？」

元気な声だった。ゆゆこさんは年上だが少し幼く見える。身長は俺

と同じか少し低いくらいだからそこで幼さを感じることはないが行動とか。そして今も元気な声でこれから自慢をしますよ。幼い。ただ、自慢するものが、なあ。

俺はゆゆこさんの部屋に案内された。そこで見たものは……大量のフィギュアと美少女のイラストが入っている抱き枕。そして山積みにされたPCゲーム。紅茶を飲むためにバルコニーに出ていたあの姿からは想像できない。

「見て見て、このDVD限定もののよ。すごいでしょ。それからこのゲーム、もう売ってないのよ。オークションでようやく手に入れたの。あとこの油絵、かわいいでしょう？」

「え、ええ」

反応に困る。俺はオカルトとかの話ならできるがオタクカルチャーについては全然だめだ。くそう、同じオから始まる言葉なのに。

「すごいですねー。あー、これ面白そう。今度やらせてくださいよ」そんな俺を放置して右京はゆゆこさんと一緒に会話をしている。自慢話は妹さんで鍛えているのだろう。褒め方が素晴らしい。まあ、妹さんの場合服装を自慢してくるから褒めるのも上手になるはずだ。それから30分くらいゆゆこさんの自慢話が続いた。これからシューティングゲームと一緒にやろうという話になった。しかもコントローラーは銃の形をしている。どこまでも本格的なシューティングだ。しかし俺はトイレに行くと行ってゆゆこさんの部屋から抜け出してきた。

まあ、ゆゆこさんは嫌いじゃないが自慢話を延々と語られるのは俺の管轄外だ。それにガンシューティングはもつと管轄外だ。

実際トイレに行った後俺はどうやって部屋に戻ろうか考えていた。うーん、この前やった玩具の剣をコントローラーにして敵を倒してゆくゲームでは圧倒的強さを誇っていたのだが……どうしたものか。

「陽太郎？」

「なんですかゆゆこさん……っていつの間に？」

「右京に聞いたんだけどさ、陽太郎ってああいうゲームが恐ろしく

苦手らしいわね」

「そ、そうですが。てかどこから出てきたんですか」

「壁をすり抜けてきたのよ」

かない様じゃあるまいしそれはありえないと考える俺。多分俺が色々と思考するのに夢中になっている隙に現れたのだろう。

「そうですか。それで、苦手なのが分かったから練習相手になってくれるわけですか？」

「残念、違います。ちょっと楓とお買い物に行ってきて欲しいの」

「重たいものでも運ぶんですか？」

「今日の夕飯の買出し」

どう考えても何か考えているとしか思えない。夕飯の買出しなら一人で行けるはずだ。

「何が目的ですか？」

「陽太郎の楓への好感度を上げるためよ」

「さてさて、ガンシユータイングくらいはできるようにならないと」

「報酬一万円」

「毛利台団地のとっぺん辺りにあるスーパーまでですよ」

「よろしい」

ふっ、エルドラド（神、主にお金関係の）は俺に味方しているぜ！

俺は超合衆国落葉のスパイ兼落葉女王陛下の護衛役である。要するに騎士。ちなみに白馬の騎士は今のところ経済的かつ技術的に無理だ。で、その騎士が年上の女性と並んで歩いている。

女性の名前は桜木楓さん。ゆゆこさんのメイドさんだ。服装はエプロンドレスにカチューシャ、というお決まりのパターンではなくどこにでもいそうな専業主婦的な服装だから変な目で見られることは無い。ただ、桜木さん本体が非常に美人でかつ謙虚な雰囲気を出しているものだから、正直俺はたまらない。

何故って、そりゃ俺は拝金主義者で利益主義でグリードで強欲で社員に長時間労働低賃金をやっていた産業革命真っ盛りのイギリス人みたいな人間ですから、桜木さんの謙虚なオーラに侵食されているわけですよ。

侵食？ いや中和と言ったほうがしっくり来る感じだ。桜木さんからはまったく敵意を感じない。妹さんは完全に敵意を周囲に振りまいているのに対して桜木さんからはむしろ好意を感じてしまう。なんかこう、妹さんとは違う魅力がある。

「佐藤さん？」

「なんででしょうか」

俺は冷静に返事をした。どんな状況下に置かれても冷静さを失わない俺。

「すみません、お嬢様のご要望とはいえ佐藤さんについてきてもらうなんて」

「構いませんよ。こちらとしてもゆゆこさんに雇われた身ですから」

「まあ、お嬢様が」

驚かれたご様子の桜木さん。それから顔を少し赤くして……

「後でお嬢様にお礼を言わないと」

なんだ、そんなに重い荷物を俺は持たされるのか。それとも卵をどっさりと持たされる等のデンジャラスな仕事を任されるのか？ そして今日の夕食は卵パーティーか？

いや、ゆゆこさんのことだ。桜木さんが悪者に絡まれたときのためボディーガードを俺にさせようとしているのかもしれない……それは無い。桜木さんはお嬢様を守るためと主張してスタンガンを携帯している。この女に手を出せば全身に電流が流れて気絶すること間違いなし。

一つ言っておくけれどね、相手を傷つける危険性のあるものを携帯するのは軽犯罪になります。そりゃもう立派な犯罪です。多分罰金とか取られます。だからバットとか木刀とかカッターナイフとかはしっかり梱包して持ち運んでください。ちなみに木刀や竹刀等の

スポーツで使う道具ならそれっぽい袋に包めば警察の目もごまかせます。注意もされません。剣道部時代の経験です。夜遅くに木刀を入れた竹刀袋を持って家に帰ろうとしていたとき、警察と目が合いました。しかし普通に挨拶を交わしただけで特に困ったことにはならなかった。

さて、話は変わるけれど、俺って階級的に騎士だろ。超合衆国落葉の女王陛下直属の騎士だろう。となると騎士道には従わなきゃいけない感があるよね。

その騎士道の約束事の中に貴婦人を大切にしようというものがある。身分制度がもう撤廃された現代にこれを応用すると女性を大切にしようという話になりそうな気がする。だから俺は今となりにいる桜木さんに気の利いた会話をしてあげようと思えるわけで……。

しかし俺も平均的な男子高校生。年上でしかも美人な女性に気の利いた会話を提供することが果たしてできるか？ 無論勿論……無理だ、不可能だ。

オカルト話なら7日間かけて語ることも不可能ではないが、俺だって相手の立場に立って物事を考えることはできる。興味の無いことを延々と語られても眠くなるだけだ。

そんなことを俺は悩みながら毛利台団地のとっぺんにあるスーパーに到着してしまったのだった。

情けない思いながらも桜木さんと一緒にスーパーの中へ入ろうとした。しかし、桜木さんが突然立ち止まった。視線が足のほうに向いているから恐らく足に何か異常があるのだろう。靴崩れだろうか。俺も桜木さんの足に注目する。長くて落ち着きのあるスカートを見線でなぞり靴の辺りへ……猫だ。桜木さんの足に猫がじゃれていた。

桜木さんが一歩動くと猫もその分だけ移動し足にくっついてくる様子。つまりついてきていると言うことだ。

基本、スーパーなどの食品を扱うお店に盲導犬以外の動物は厳禁。そしてペットでないとはいえこの猫も例外ではない。

さて、どうしたものか。と悩んでいると桜木さんは手をポケットに突っ込んだ。ま、まさか……スタンガンで解決する気か？

桜木さんはポケットから手を引き抜いた。手に握られていたのは……煮干？　なんか煮干が桜木さんの手に握られているんですけれど。

桜木さんは煮干が入った小さな袋を開けて猫の周囲にばら撒いた。次にしゃがんで猫の頭をなでると、

「ごめんね、スーパーの中は動物が入っちゃいけないの。今はこれで我慢してね」

猫が煮干を食べている隙に俺と桜木さんはスーパーの中に入った。

「桜木さん、どうしてポケットに煮干が？」

物凄く謎だったから尋ねる。

「そんな日もありますよ」

そんな日って、どんな日だよ。

あっ、そうだ。猫の話をして場の空気を温めるか。

「桜木さん。そういえば古代エジプトでは猫を崇拜していたんですよ」

「そうなんですか」

「ええ、猫の顔をした神様がいるんですよ。猫を殺してしまつて死罪になった人もいるほどです」

「それはかわいそうに」

「文化ですからね。法律って言うのは文化と歴史が反映されますから。たとえば日本で麻薬を所持していたとしても懲役何十年ということにはなりません。中国ではかなり重い罪になるそうです。アヘン戦争の影響でしょうね」

「佐藤さんって物知りですね」

「いえ、僕よりも右京のほうが色々と役に立つ知識を持っていますよ。僕が持っている知識なんて役に立たないものばかりです」

ここで少し苦笑いして見せた。でも桜木さんは本物の笑顔を浮かべて、

「でも佐藤さんのお話のおかげで私は楽しい気分になりました。少し怖い部分もありましたけれど、役に立たないなんて事はありませんよ」

「そうですか。ありがとうございます」

俺はバステト（猫の顔をした神様）に感謝した。あの時猫を登場させてくれてありがとう、と。

この後も色々と会話が弾みっぱなしで、俺と桜木さんは、思いっきり買い物を楽しんだ。

7日目 日曜日。

「そうか、もう一週間か」

俺（秋山右京）は自室の天井を見上げて言った。佐藤と小説を書いてもう一週間になる。佐藤との約束では一週間リレー小説を書くと言う話になっていたが、もう一週間なのだ。

俺が最後の章を担当することになっていたが、午前中のうちに書き上げてある。内容はその日見た夢の話だ。なんか巨大ロボットから住民を避難させるという大掛かりなものだ。午後はその話の推敲でもしようかなと考えていたが、落葉の乱入により誤字脱字のチェックしかできなかった。

で、乱入してきた落葉は今夜星と一緒に見に行こうと言っていた。何か引かかるものがあつたが別に断る理由もないし佐藤も一緒に行けらしいので、仮に落葉が暴走モードに入つたとしても地球の破壊を阻止できるだろうし、行くことにした。

だから俺は約束の時間が来るまで部屋でボーっとしていたのだ。夕食も（俺は早めに、落葉は電光石火のごとく）済ませて、やることといえば明日から始まる学校の授業内容を予習するくらいだった。

その時ノックの音がした。返事をする前に時計を見る。おや、約

束の8時だ。多分落葉だな。

「はいはい、今行くよ」

ドアを開ける。予想通り落葉が立っていた。ただ予想と違ったのは落葉の服装だ。赤いワンピースドレスだった。それを見て俺は、

「おいおい、夜にその服装は無いだろ。ちよっと待ってろ」

俺は扉を閉めずにクローゼットの中を漁った。出てきたのは夕日のようなオレンジ色のセーター。

それを持って落葉に歩み寄り、言う。

「春とはいえ夜は冷えるぞ。これ着とけ」

落葉は一瞬何も考えていないかのような表情を浮かべた。何故だろう。

「どうした？」

「ううん、なんでもない。ありがとう兄さん」

落葉はすぐにセーターを着た。

「行きましょう、兄さん」

俺と落葉は504号室の前で佐藤と合流してマンションの屋上に向かった。

そこから見る星は街灯や家の明かりのせいであまりよく見えない。だが、いくつかの星と月はしっかり見ることができた。

「昔の人は全ての見られたのかしら？」

落葉がふとそんな言葉を漏らした。俺と佐藤は顔を見合わせた。佐藤が「右京、お前が言ってやれ」と言いたそうな顔をしていたので俺が答えることにした。

「昔の人が星を全て見られたかどうかは分からない。だけど星を見て物語を考えたりはしていたみたいだね。たとえば牛飼い座。あれだ。あの牛飼いが誰なのかは今の研究じゃはっきりしてないみたいだけれど、伝説によれば兄弟に財産を全て持っていていかれて追放された。そして世界中をさまよった男だと言う」

「兄弟に追放された……悲しい話ね」

落葉はしばらく何も言わなかった。もしかしたらその兄弟と俺た

ち三人のことを重ね合わせているのかもしれない。この三人なら、そんなことは絶対にありえないと。いや、やっぱ落葉は除外。

そしてまたしばらくして落葉が口を開いた。

「ねえ兄さん」

「どうした」

「寒くないかな」

俺は正直に、

「いや、そんなに寒くは……」

「寒いよね？」

「だから寒くは……」

「寒いと言いなさい」

落葉の視線が冷たかった。

「さ、寒い。凄く寒い」

「佐藤君、あったかい飲み物買ってきて」

「リョウカイ」

「おい佐藤、何故棒読みなんだ。ってどこへ行く」

「コンビニ ヘ カンコーヒー ヲ カイ ニ」

置き去りにされた俺。そして隣には落葉。最悪な環境だ。

「寒いわね兄さん」

「ああ、寒い」

逆らったら殺される。佐藤がいない今、俺ができるのは落葉の意見にひたすら同意し機嫌を損ねないことだ。

「ねえ兄さん、そばに寄ってもいいかな」

「ああ、いいぞ……って、お前、何をする気だ」

「もういいって言ったよね。男に二言は無いわよね」

「俺は武士じゃないし、ひよろひよろの男だから二言どころか無限言くらいであるんだよ」

「残念、もういいって言ったよね。じゃあ寄ろうかな」

そう言って落葉は俺の背中から抱きついてきた。落葉の豊かな胸が背中に当たる。

うぜえ、巨乳とか、ロリコンの天敵宿敵！ はっきり言って気持ち悪い、といつもの俺なら思うはずなのだが、なぜか少し気分がよかった。

「これなら暖かいでしょ？」

落葉は言った。だが、正直かえって寒い。心が。

「兄さん」

「なんだ？」

「……ダメかな？」

「何が？」

「……ううん、なんでもない」

「あそ」

落葉が何を言いたかったのかは分からないし詮索する気もない。だから俺は落葉に抱きつかれながらあることを考えた。リレー小説のタイトルだ。佐藤は俺が決めていいと言ったが、さてどうしたものか。

そうだな、秋山佐藤のデイベイデイ、俺と佐藤の日常を書いたわけだから、こんな感じでいいだろう。

その後、俺は星の観察が終わるとすぐに自分の部屋に戻った。そして自己紹介プリントの最後の欄に、漢字を三文字書いた。『小説家』 これで明日提出することができる。

理由？ まあ、やっぱり楽しかったから、かな。これからもなんだが続けてみたいんだ。でも、しばらくは佐藤と共同制作になりそうかな。明日になったらもう一度誘ってみよう。リレー小説を書かないか、と。

（後書き）

いかがでしたでしょうか。やっぱり一人一人のキャラクターは濃くてもストーリーがまとまっていないと考えた方が多いのではないのでしょうか？

実はこの作品、学校が主催した文芸対象に投稿するために生産スピード重視で書いた粗悪品です。キャラクターは日ごろ使っているキャラの使いまわしで登場人物の性格には自信があるのですが、まあ要するに自信ないんですね。

とはいえこの作品は佳作に輝いてしまいました。はい、おかげさまで。成長の余地がまだまだありますのでどうぞ批評のほうをお手柔らかにお願いします。

最後に読んで頂いてありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9421n/>

秋山佐藤のデイバイデイ

2010年10月12日04時18分発行